



日本地球化学会ニュース

No.187 December 2006

Contents

学会関係報告	2
2006年度日本地球化学会年会報告	
「柴田賞・学会賞・奨励賞」2006年度受賞者紹介	
第1回地球化学会ショートコース報告	
鳥居基金助成実施報告（2005年度第2回，2006年度第1回）	
2006年度日本地球化学会総会報告	
学会からのお知らせ	23
「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」2007年度受賞候補者推薦の募集	
2007年度第1回鳥居基金助成の募集	
HPへの大学院入試情報の掲載開始	
学会評議員会議事録	23
2006年度第2回評議員会	
学会・研究会などのお知らせ	26
日本地球惑星科学連合2007年大会（5/19～24）	
ゴールドシュミット国際会議2007（8/19～24）	
人事公募	28
九州大学理学研究院地球惑星科学部門教授・1名（1/31〆切）	
院生による研究室紹介 No.4	28
広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻 表層環境地球化学研究室	
女性研究者に聞く No.4	31
Department of Geology and Geophysics, University of Wisconsin-Madison	
Associate Scientist, Director of Ion Microprobe Laboratory 木多紀子	
書評	32
日本地球惑星科学連合ニュース No.03	34

学会関係報告

●2006年度日本地球化学会年会報告

日本地球化学会年会実行委員会委員長
永井尚生（日本大学・文理学部）

2006年度日本地球化学会年会第53回大会は9月13日（水）から15日（金）の3日間にわたって、日本大学文理学部（百周年記念館、4号館、学生食堂）で開催された。日本大学での開催は初めてであったが、東京では2001年学習院大学以来の開催となった。

本年会に先立ち、9月10日（日）14:00より16:00まで、日本大学文理学部百周年記念館において公開講演会が開催された。“深海底から地球の未来を求めて”というテーマで、東京大学海洋研究所・川幡穂高教授による“深海底から地球を探る”，海洋研究開発機構高知コア研究所・徐垣所長“地球深部探査船「ちきゅう」が導く「地球」の新たな姿”，の2件の講演が行われた。講演後、会場から多数の質問が行われ、参加者の関心の高さが伺われた。回収されたアンケートには「質が高い」という感想が多く寄せられ、充実した講演内容であったと思われるが、「若干難しい」という声もあり、さらなる工夫が必要と思われる。公開講演会を継続的に開催するにあたっては、講演内容への配慮のみならず、さらなる事前の効果的宣伝活動が必要と思われる。また、初めての試みとして、講演会の記録・ネットワーク公開のため、ビデオ撮影・CD-ROM作成・VOD（Video On Demand）の配信を行った。VODについては10月より、<http://msdemo.mediasite.co.jp/>において公開されている。なお、今回はメディアサイトという会社の製品の売り込みの一環として、宣伝のため無償であった。

本年会の前日、9月12日（火）13:00より20:00まで、日本大学文理学部百周年記念館において、年会にリンクする形式で日本地球化学会将来計画委員会主催により第1回地球化学会ショートコースが開催された。若い人の参加が多く、将来の地球化学会の発展にとって重要な活動と思われる。詳細についてはショートコースの報告を参照されたい。

本年会の講演数および参加者は以下の通りである。
口頭発表：157件
ポスター発表：98件
参加者：357人（名誉会員など5人，正会員188人，学生会員59人，非会員28人，学生非会員82人）

課題講演は、1）東アジア・太平洋域におけるエアロゾルと関連気体成分の地球化学、2）環境地球化学の新手法・新指標、3）固体地球の脱ガスに係わる地球化学、4）核・放射化学と宇宙・地球化学の接点、5）地球化学の立場からみた新しい科学教育、であった。

口頭発表においては、講演用ファイルをUSBメモリー等に保存して受付に提出し、担当者が会場に設置されたPCにファイルをコピーする、という方式を採用した。1日目午前中は、やや手間取ったが、その後はトラブルなくファイル受付システムは機能した。講演会場で使用されたPCがWindowsのみであり、数名の発表者から、持参したMacintosh PCを使用したなどの要望があったので、この要望には柔軟に対処したが、PC繋ぎ替え時のトラブルは発生しなかった。この方式の利点はPC繋ぎ替え時のタイムロスをなくすることができることである。この効果と座長に対する「時間厳守のお願い」の効果により、大部分のセッションでほぼ時間通りに講演が行われた。また、この方式ではファイルの管理をきちんとする必要がある、講演終了後には確実にファイルを消去することが肝要である。情報管理に不安を感じる講演者に対しては、講演時に持参したUSBメモリー等を、講演会場のPCに繋いで発表して貰う方式で対処しても良いと思われる。

ポスター発表と展示は百周年記念館で行われた。ポスター発表は広いスペースが確保できたので、全ポスターを1日目から3日目まで一斉に掲示したため、ゆとりを持ってポスターの内容について議論できた。なお、コアタイムについては1日目と2日目の2回に分けて行った。また、初の試みとして優れたポスター発表を行なった日本地球化学会学生会員に若手優秀ポスター賞を贈呈した。ポスター賞受賞者は、清水綾（東大院理）、土肥俊忠（学習院大理）、光延聖（広島大院理）、高橋貴文（東工大原子炉研）、の4名の学生会員であった。

1日目の夜間小集会では、課題講演5）の内容をさらに一般化し、学会全体として教育に果たしうる役割、今後どのような取り組みを推進すべきか等について、幅広い視点から自由な議論が行なわれた。また、現在の学会の会員数減少傾向にどのようにして歯止めをかけられるかについても意見交換が行われた。

2日目の午後は、総会に続いて受賞講演会が開かれた。講演は、柴田賞杉崎隆一氏による“地球化学の手

法によるテクトニクス場と地下深部の研究”，学会賞
坂本尚義氏による“酸素同位体局所精密分析法の開発
とそれを用いた太陽系初期の酸素同位体不均一に関す
る研究”，奨励賞高野淑識氏による“海底熱水系にお
ける生物―地質相互作用の解明に関する研究”，奨励
賞橘 省吾氏による“消滅核種⁶⁰Fe 初生存在度に基づ
く初期太陽系誕生・進化に関する研究”，奨励賞山本
順司氏による“マントル起源鉱物中の流体包有物を用
いた沈み込み帯の物質循環系の究明”であった。同日
18：00より，学生食堂において懇親会が開かれ，参加
者は150人以上であった。なお，懇親会においては若
手優秀ポスター賞の受賞者の発表および賞状などの授
与が行われたが，受賞者の参加は1名のみであり，他
の3名の受賞者については，代理として指導教員の表
彰・挨拶となったのが残念であった。懇親会は，教
員・学生双方にとって率直な意見交換・情報交換（収
集），学生の就職活動などにおいて貴重な場であるの
で，指導教員は学生に懇親会への参加を強く勧めて戴

きたと思った。

今回は，年会業務のかかなりの部分を国際文献印刷社
に依頼した。これには，年会 HP の作成・管理，HP
を通しての参加登録・講演申込・講演要旨受付・参加
登録料収受・問い合わせへの対応・講演要旨集の印刷
及び発送，などが含まれる。なお，東京開催であった
ので旅行・宿泊の手配は行わなかった。年会 HP の公
開当初は，幾つかの不備があり，修正，問い合わせに
対する応対が相当数あったが，大きなトラブルはな
く，ある程度完成したシステムを次年度に引き継げる
と思われる。また，事前参加登録料等の支払いは，郵
便振替とクレジットカード支払いを併用すると，国際
文献印刷社に支払う手数料が高くなるため，クレジッ
トカードによるオンライン決済のみとした。これに対
する苦情は殆どなく，当日受付者数は全参加登録者数
の28%とやや多かったが，東京で開催された2001年と
ほぼ同じ割合であったので，時代の流れとしてクレ
ジットカード支払いのみで構わないと思われた。



2006年度年会を仕切っていただいた日本大学文理学部ならびに東京大学海洋
研究所の皆さん

●「柴田賞・学会賞・奨励賞」2006年度受賞者紹介

柴田賞：杉崎隆一（名古屋大学名誉教授）

受賞題目：「地球化学的手法によるテクトニクス場と地下深部の研究」



パターン、パタパタパタパタ。
この音が聞こえると、それまで談笑していた学生たちは、そそくさと机に向かい、実験データの整理を始める。僕が学生だった頃、杉崎先生は5階から屋上へ上がる途中の“納戸”のような部屋にとじこもり、いつも論文を書いていた。そこから木製の扉を開け、勢いよく締めてから、速足で5階の学生部屋に来るのである。そして、学生の顔を見ると、必ず「どうかね？」と尋ねる。この質問は、「実験はどこまで進んでいるのかね？ はやく論文にきなさいよ。」を意味している。当時は、その一言によってだいぶん尻をたたかれ、結果的にはずいぶんと研究が進んだように思う。このように書くと皆さんは、杉崎先生は学生に対してとても厳しかったのだなという印象を持たれるだろうが、それは間違いはない。ただし、杉崎先生は、常に先生ご自身にも「どうかね？」と尋ねていたように思う。

杉崎先生の略歴は以下のようなものである。1954年名古屋大学理学部を卒業後、博士課程を経て1960年に名古屋大学理学部助手。同助教授を経て1989年に同教授。1995年に名古屋大学を定年退職後、1996年より2001年までの5年間、名城大学教職課程部教授。

この45年間以上にわたって、杉崎先生は鋭い観察力と直感力で独自の地球科学観を構築し、それを地球化学的手法によって地球科学の諸分野に提案し続けてきた。それらの成果は、“Nature”と“Science”（計8編、うち7編について先生が筆頭著者）をはじめとし、多くの一流国際誌に掲載されている。その内容は非常に広範囲かつ膨大であるため、本稿ですべてを紹介するのは無理である。よって、その中でも特に独創的なものである地球化学的手法を用いた「テクトニクス場の研究」と「地下深部の研究」について、その概要を述べてみたい。

1. 地球化学的手法による日本の中・古生界のテクトニクス場の研究

杉崎先生は、日本の中・古生界における火成岩類、細粒碎屑岩類、珪質堆積岩類、含マンガン堆積岩類の

成因や生成環境を化学的手法に基づき解明し、岩石学・構造地質学などの観点と関連させながらそれらの妥当性を検証した。この研究の中で、地質学的情報に対して、“面”として取り扱えるほど大量の化学分析データを得ることを目指し、湿式大量分析法や蛍光X線分析法による主要・微量成分の自動分析法を確立した。これらの手法は、いずれも多くの研究機関・教育機関で利用されている。

次いで、この確立した手法を利用して、日本の中・古生界の緑色岩が海洋性の性格を有することを世界に先駆けて報告し、それに関する研究を方向付けた。また、緑色岩の化学的性格が地質区や時代により変化することを見だし、それらの岩石の生成環境が地質学的な張力場であったことも結論づけた。

さらに、珪質岩においては現世堆積物との比較により、堆積岩中のMn/Ti比とその堆積速度の関係を定量化し、日本の中・古生界の珪質岩が堆積速度の“比較的早い”環境で生成したことを明らかにした。また、珪質・泥質堆積岩中に存在するマイクロマンガンノジュールの化学組成がその堆積環境と密接に関係していることを見だし、その堆積学的価値を示した。そして、火成岩や堆積岩の組成についてのこれらの結果はプレートの運動と密接に関係している事を明らかにすると共に、主にオーストラリアの先カンブリア地域の岩石への応用を通して、地球創成期における環境の特殊性を解明した。今や、テクトニクス場の研究においては当然の手法としてこの種の化学的手法が使われているが、これは、杉崎先生の研究成果によるところが非常に大きいといえる。

2. 地球化学的手法による地下深部の研究

杉崎先生は、地下水採取のための井戸のボーリングコア試料を主に利用して濃尾平野の地下構造解析を行うと共に、それに関連して濃尾平野全域にわたる多数の地下水の溶存成分を分析した。地下水が地層と反応する過程での水質変化を定量化し、それを地下水流動方向の推定に利用する方法を確立し、逆に地下水の水質を活断層等の地下構造の解明に利用できる事を明らかにした。また、その溶存ガスの季節的、地域的分布を用いて地下水の自然流速を決定することに成功した。これらの結果は地下水過剰汲み上げによって生じた地盤沈下の過程における地下水の役割の解明や地熱開発などに利用できることなど、多くの地下水の水理学的応用にも適用できることを示した。この研究は、今なお環境問題に関連した数多くの分野に波及し、そ

の発展に寄与している。

さらに、地下水溶存ガスの研究を進展させ、地震予知を目的とした地下ガス組成の観測とそれに関連する実験的研究を行った。1979年頃、ソ連、中国等では地下ガス中のラドンの挙動と地震との関係が注目されていた。それにたいし、杉崎先生はこの問題に対する単成分の変化の追跡の欠陥を指摘し、地下深部由来で、かつ大気中で低い存在度を示す水素やヘリウムなどの相対的存在比に注目した。そして、地表の影響を排除するために大気起源のアルゴンで基準化した値 (H_2/Ar 比や He/Ar 比など) を用いる事により、地下深部のみの情報を正確に捉え得ることを強調した。また、広範囲の調査地域において、高濃度の水素が、とくに比較的新しい活断層から発生していることを見いだした。その原因として、新鮮な岩石の割れ目と水の反応により水素が生じることも室内実験により突き止めた。さらに、簡便で安価なガスクロマトグラフと公衆回線によるデータ転送を組み合わせることで地震予知のための野外ガス連続観測システムを構築し、研究室にいながらにしてガスデータをリアルタイムで獲得できるようにした。その結果、1984年の長野県西部地震、1995年の兵庫県南部地震といった大規模地震や、観測点付近で発生した多くの小規模地震に伴ってガス比が変動することを明らかにすると共に、ガス湧出量も同様に变化する事も見出した。この地球化学的手法による地震予知の研究は高い独創性を持ち、地球化学、地質学、地球物理学など地球科学の多方面にわたってその考え方の基礎が活用され続けている。

また、上記の地下深部ガスの研究過程において、花崗岩地帯から発生する地下ガス中にメタンやエタンなどの有機物が存在することに着目し、火成岩中に存在する有機物の発見とその起源の推定をも試みた。“生物活動と密接に関係し、熱的に不安定である”という有機物に対する常識からすれば、有機物が高温の火成活動を経験した岩石中に存在するのは非常に奇異に感じられることである。しかし、杉崎先生はこの常識にとらわれることなく、火成岩中に存在するかもしれない高分子で複雑な有機物の発見を試み、石油に酷似した組成を持つ高分子有機物が、ある種の岩石中に存在することを見いだした。そして、その高分子有機物を“マントル有機物”と名付け、その起源についての考察を行った。この研究成果は地球科学分野において“生命の起源”、“石油の起源”、“地球内部の炭素循環”等の重要なテーマを解明するための有益な情報を

提供する可能性がある。さらに、今後、高温・高圧環境における有機化学領域の研究の発展に大きく寄与し得るものである。

先に述べたように、杉崎先生の業績の特徴は、その研究対象が多岐にわたっていることである。一生涯同じテーマを深く掘り下げていくタイプの研究者もいれば、いくつものテーマについて幅広く研究をしていくタイプの研究者もいるが、明らかに、杉崎先生は後者である。このような研究スタイルは、ともすれば発散して荒削りな研究になりがちである。確かに、杉崎先生の論文を読んでいると若干荒削りな印象を受けることもある。しかし、その研究の最も本質的な部分はどうか？ と考えたとき、そこには、しっかりと根を張り他の追従を許さないものを感じる。分析技術が進んだいま、杉崎先生が手がけてきたテーマについて最新分析機器を用いてより深く研究したとしても、杉崎先生が導き出した結論を大きく変更するようなものは出ないのではないかと思えて仕方がない。それは、杉崎先生が広い視野でものを見つつ、真っ先にその最も重要な部分を抽出し切っているからではないだろうか。言い換えるなら、杉崎先生は、観測事実や実験事実と真摯に向かい合い、既成の概念にとらわれることなく、そこから普遍的な結論を導き出すことを貫いた研究者といえるだろう。杉崎先生の研究姿勢は、地質学や地球物理学などの情報をも参照しつつ、膨大な化学的データから自然界を支配する過程の普遍性を見つけ出そうとする情熱と、苦しくても他の研究者の真似をしないという気概から生まれたものである。この姿勢は、杉崎先生の周囲の研究者はもちろんのこと、世界の研究者に対して大きな影響を与えてきた。

杉崎先生は研究の話をしているとき、“目を輝かせながら遊びに熱中している子供”のような表情をする。こんな表情を見ると、いつも眉間にしわを寄せて実験データを睨んでいる僕としては、「自分もこんな風になれたらなあ。」とうらやましく思ってしまう。現在、杉崎先生は、まだ世に出していない膨大なデータをもとに論文を書いている。また地球化学の常識を覆し、皆をあっと言わせるような研究を生み出そうとしているのだろう。今後、ますますの活躍が期待される。

三村耕一（名古屋大学環境学研究科）

学会賞：圀本尚義会員(北海道大学大学院理学研究院)

受賞題目：「酸素同位体局所精密分析法の開発とそれを用いた太陽系初期の酸素同位体不均一に関する研究」



圀本さんは、1985年筑波大学大学院で鉱物・マグマ間の陰イオン・陽イオンの分配に関する研究で博士の学位を取得した。その後筑波大学の助手から東京工業大学(地球惑星科学教室)の助教授を経て、2005年から北海道大学(地球惑星科学教室)の教授の職に就いた。筑波大学の頃から今日まで20年余り、「分配」、「拡散」、「酸素同位体」と研究の力点は変わってきているが、一貫してイオンプローブ(SIMS)を手段とする惑星物質研究に従事してこられた。大まかに眺めると、圀本さんが取り組んできた主なテーマは、その時代、時代で最も注目されるような固体地球科学の重要課題であることに気がつきます(本人がどの程度それを意識してきたか、直接聞いたことはないが)。また、彼の論文リスト(原著論文：105編、総説31編、著書3編、国際会議要旨128編；2005年現在)をよくみると、SIMSがあまり注目されていなかった時代にその将来性を見通し、イオンの検出、特にマッピングについて機器の開発から結果を得るまで自力で進めた点で、その斬新な着想とチャレンジ精神、実行力には並外れたものがあり驚かされます。今回の受賞対象となった酸素同位体に関する研究業績には分析機器の開発とサイエンスが融合した成果であります。それはまた科学研究費(2001～2004年：基盤研究(A)「原始惑星系の物質大循環」；2005～2009年：基盤研究(S)「同位体による先太陽系史と太陽系創成期の解明」)にもサポートされたものであって何とも力強いものがあります。

ここ30年来惑星科学分野における最大の課題に惑星物質の同位体の不均一分布の問題がある。とりわけ1973年 R. N. Clayton らの発見に端を発した酸素同位体の不均一分布の解明は重要視され、それを抜きにしては太陽系始原物質の起源は語れないと言っても過言ではない。これまで始原的隕石をはじめ種々の惑星物質で多くの元素同位体の不均一分布が見出され、星の生成・進化(いわゆる「星間核起源」)との関連で議論されているが、酸素同位体比異常については他の同位体比異常との関連があまりないことよりその解明は

依然として混沌としているのが現状である。その中であって圀本さんは、SIMS による精密な局所分析技術の開発、その技術を応用した隕石中の高温起源成分(CAI やコンドリュール)の酸素同位体やマグネシウムなどの同位体分析と酸素同位体比異常に関するモデリングに及ぶ成果をあげている。

圀本さんは学位取得後まもなく、酸素同位体比異常の解明には拡散の役割が重要として始原的隕石のCAI 構成鉱物の酸素同位体の拡散係数の測定に着手し、従来より二桁も早い拡散係数を見出した。一方、SIMS による隕石中の微小領域の詳細な同位体情報が不可欠であることから、高感度の検出器を導入し、世界に先駆けて微小領域における酸素の3同位体の分析を可能にし、問題となっているCAI やコンドリュールについて詳細な酸素同位体分布を明らかにした。その間、CAI と星雲ガスとの急速な酸素同位体交換反応を示す初めての証拠、コンドリュールのコア部分とリムとの間で大きな酸素同位体の違いと星雲の変成過程での酸素同位体の特徴を示し、コンドリュールの形成過程と変成のタイムスケールの解明、CAI とコンドリュールの形成期間が重複しているという有力な証拠の発見、これまで知られる最大の負の酸素同位体比異常の発見など、始原的隕石の酸素同位体分布と岩石組織との関連、そしてコンドリュールやCAI の起源に関する時間軸の解明へ向けた重要な発見を次々と成し遂げていった。

圀本さんはかねてよりイオンプローブ(SIMS)を「同位体顕微鏡」と位置ずけて技術的な開発をすすめてきたが、半導体検出器を用いた同位体のイメージング技術の開発研究は注目すべきものがある。現在では高額なお金を出せば nano-SIMS が買える時代になっているが、圀本さんはそれ以前に既により小スポットの同位体イメージング技術を開発し、ついに世界に先がけて炭素質コンドライト中に大きな酸素同位体比異常を持つケイ酸塩スターダストの発見に成功した。この研究は独自の機器の開発によって達成された点で特筆すべき成果である。

このような始原的隕石の分析研究に加え、圀本さんは最近、酸素同位体比異常が太陽系形成をもたらした分子雲に起源を持つとする新しい太陽系形成モデルを発表した。自らの分析研究の成果を基本に据えて構築されたこのモデルは、30年以上も未解決となっている

酸素同位体比異常の成因解明へ向けた最近の主要な流れの一つとして注目されている。

これらの成果の多くは東京工業大学や筑波大学のこの指導学生との共同研究で達成されているが、学習院大学（名誉教授）の長沢宏先生や UCLA の Wasson 教授、ハワイ大学の Krot 博士など国内外の一流の研究者がしばしば東工大の 冨本さん（彼らは “Yoshi” と呼んでいる）を訪ね共同研究をしたことも見逃せない。このことは、冨本さんの持つ優れた技能とその人柄を考えると、（本人がどの程度意識していたかは別）彼が如何に自分に自信をもち研究室をオープンにしてより大きな刺激を学生に与え、叱咤・激励したか伺い知ることができる。彼は元々和歌山県のみかん農家の長男として生まれ、小さい頃は人見知りの激しい引っ込み思案の子供だったらしい。そんな彼が今では国際舞台で活躍し、学生ともよくジョークや駄じゃれを言ったりやり返えされたりしながら学生を育てている。そのような東工大グループから多くの若い研究者が育ち国内外で活躍している。筆者はかつて NASA の月惑星会議でそのうちの何人かと出会い、真摯で伸び伸びとした彼らの態度に大変印象深いものを感じたことがあったが、その後間もなく彼らが GCA, Nature, Science など一流誌に次々と論文を発表したり、その幾人かが国内外で論文賞などをもらったというニュースを聞き驚かされた。今回の受賞については、彼を最もよく知る Wasson 教授と Krot 博士にもお知らせしたところ、お二人からも率直な喜びのメールをもらったので以下にその一部を紹介したい。

“Dear Noboru; I am most pleased that he was chosen for this well-deserved honor. Yoshi is a clever scientist who has thought much about many of the problems in understanding and modeling the oxygen-isotope anomalies in carbonaceous chondrites. We don't always agree, but discussions with him are always intellectually stimulating; they have brought me several new insights. His breadth is well demonstrated by the Yurimoto and Kuramoto (2004) paper making the plausible suggestion that the anomalies were formed in a molecular cloud..... I look forward to the exciting results still to come from Yoshi's new facility and team at Hokkaido..... John” (John Wasson).

“Dear Noboru, Yoshi is not only a bright scientist, he is also a very talented teacher, who cares about his students. He has already educated several world-class experts in SIMS microanalysis of extra-terrestrial materials, including those I know personally—Tak Kunihiro, Kazu Nagashima, Moto Ito, Shoichi Ito, and Miwa Yoshitake.All people (including McKeegan, Messenger and Huss) I talked to are very happy to work with Yoshi's former students who clearly maintain high standards of Yoshi's lab and Yoshi should be proud of them..... Sasha.” (Sasha Krot).

筆者はこれまで長沢先生を介して冨本さんと長い付き合いがあるが、よく考えてみると彼のイオンプローブを未だに見せてもらったことがない。北大では現在基盤研究(S)が展開中であり、Wasson 教授も述べているように、今後にも大いに期待したいところです。

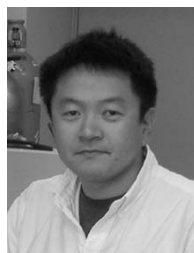
中村 昇（神戸大学名誉教授）



松田准一会长から学会賞を授与される冨本尚義会員

奨励賞：高野淑識会員(北海道大学大学院理学研究院)

受賞題目：「海底熱水系における生物―地質相互作用の解明に関する研究」



高野淑識さんは、1998年に筑波大学第一群自然科学類化学を卒業、その後同修士課程に進まりました。博士課程は横浜国立大学大学院工学研究科の小林憲正教授の指導のもとでござれ、2003年に博士号を取得し、独立行政法人産業

技術総合研究所で2年間特別研究員をされました。現在は北海道大学大学院理学研究院で日本学術振興会特別研究員をされています。

高野淑識さんは、学部・大学院生の時代から宇宙化学的・地球化学的手法に基づいて「物質進化における複雑有機物と生体分子光学活性に関する研究」、「易分解性有機物と微生物活動の初期続成変化に関する研究」、「海底熱水系における生物―地質相互作用の解明に関する研究」を行なってきました。特に、多成分系親生元素から構成される高分子量複雑有機物中に含まれる光学異性体の微量光学分割に成功し、不斉の起源に関する新しいシナリオを見出しました。一方、光学活性や有機物活性の評価が地下生物圏を検証する上で良い生化学的指標となることを明らかにした点でこの分野に大きな貢献をしたと考えられます。

一番最初のテーマは、物質と生命を分ける決定的な境界が、生体分子の光学活性である点に注目した研究です。例えば、既知の地球型生命のタンパク質を構成するアミノ酸は、基本的にL-体です。しかし、生体有機物を無生物的に合成すると、D-体とL-体が等量（ラセミ体）できます。そのような対称性を破る不斉の起源について実験的にアプローチしました。まず、模擬星間型ガス組成（炭素源として一酸化炭素、窒素源としてアンモニアまたは窒素、そして水蒸気）に粒子線、ガンマ線、軟X線、紫外線などを照射し、生成物の特徴を記載しました。(1)生成物を酸加水分解するとクロマトグラフでアミノ酸や核酸塩基のシグナルが出現することから、生成物は、アミノ酸や核酸塩基そのものではなく、何らかの結合態としてのアミノ酸や核酸の前駆体（Precursor）であること。(2)照射生成物は、高分子量（陽子線照射生成物で約3,000～数100程度の分子量）で、種々のアルキルアミド化合物や多環式化合物、複素環式化合物など複雑な有機物から構成されていること。(3)その高分子量複雑有機物に

シンクロトロン放射光からの円偏光照射（右円偏光または左円偏光）を行なうと、D-体とL-体いずれかの比率が優位に変動すること、を明らかにしました。(1)、(2)のアミノ酸や核酸塩基の前駆体を含む高分子量複雑有機物は、熱やガンマ線などに対しても桁違いで安定に存在できます。このため、(3)のように何らかの要因でD-体とL-体の比率に差が生じて、光学活性が出現するのであれば、炭素質隕石に含まれる特殊なアミノ酸の存在が示すように、一方の立体的偏りが優勢に働き、その光学活性が保持あるいは増幅されたシナリオが考えられます。

次のテーマは、易分解性有機物に関するものです。陸源堆積物や海底堆積物に含まれる易分解性有機物（Labile）は、微生物分解、酸素被爆や自然加水分解による化学分解を経て、準難分解性有機物（Semi-labile）へと変化し、難分解性有機物（Refractory）へと徐々に変化します。易分解性有機物に富むということは微生物が食べやすい有機物に富むということを意味しています。種々の生物指標化合物と微生物活動の相関関係を数値化したところ、地下微生物のバイオマスと易分解性有機物は、正の相関を示し、逆に地下微生物のバイオマスと続成作用による二次生成有機物やラセミ化反応生成物は、負の相関を示しました。地球表層の堆積環境では、ある地質学的時間を境にして、アミノ酸のラセミ化反応速度定数、有機炭素の分解速度定数、酵素活性の失活速度定数にオーダーで急激な変化（変曲点）が現れることが分かりました。また、安定炭素・窒素同位体の分別反応もその変曲点が境界になることが分かりました。この変曲点は、地質学的時間スケールでの易分解性有機物（Labile）から難分解性有機物（Refractory）へと続成変化する生体有機物の遷移状態であり、見かけ上の地下微生物の失活速度とも符号することを明らかにしました。

最後のテーマは熱水系に関するもので、「海底熱水系における生物・地質相互作用の解明に関する国際共同研究」（アーキアンパーク計画）の活動に関係しています。島弧マグマからのデイサイト質の発散物に支えられた海底熱水系（伊豆小笠原弧水曜海山）や玄武岩質の背弧拡大軸（南部マリアナ）の海底熱水系を直接掘削し、熱水孔下に存在する地下生物圏の記載に成功しました。潜航調査で熱水孔から直接採取した粒子態あるいは溶存態有機物に含まれる有機物量よりもチムニーに濃集している有機物量の方が多く、このことは、塊状硫化物形成による金、銀、水銀、ヒ素、カド

ミニウムなどの重金属元素の鉱化とともに生物起源の有機物濃集も並行しておきていることを示唆するものでした。チムニー内部構造の横断面的特徴を見るために、熱水が通っていた内部 (interior)、中部 (middle)、周辺海水と接していた外部 (exterior)、熱水を噴出するベント部 (vent) に細分化し、チムニー構造と微生物ポテンシャルのローカリティを検証しました。

以上のことを総合して、高野淑識さんは日本地球化学会奨励賞を受賞されました。高野淑識さんはサンプリングを含むフィールド調査に、それが陸上であっても、研究船航海であっても、自ら参加し、試料を採取し、そして、室内で実験を行なうというように、すべてを自分で行なってきました。今後は、これらの経験を発展させ、室内および室外での研究と教育の場で一層の活躍が大いに期待されます。

川幡穂高 (東京大学大学院新領域創成科学研究科、海洋研究所)

奨励賞：橘 省吾会員 (東京大学大学院理学研究科)

受賞題目：「隕石中の局所同位体分析に基づいた初期太陽系進化の研究」



橘さんは大阪大学理学部宇宙地球科学科、同大学院理学研究科宇宙地球科学専攻にて山明教授の指導のもと、学部、修士、博士の学位を授与されました。博士論文ではエンスタタイトの蒸発実験から

初期太陽系の Mg/Si 分別過程を推定する研究をされました。その後、日本学術振興会特別研究員 (東京大学及び、米国アリゾナ州立大学) を経て東京大学大学院理学系研究科の助手に着任されましたが、一貫して初期太陽系の鉱物や惑星の化学進化を定量的に調べるために、実験岩石学に基礎をおきつつ、始原的隕石中の鉱物の精密な同位体および化学分析を統合した意欲的な研究を行ってきました。アリゾナ州立大学在籍中に二次イオン質量分析計 (SIMS) を用いて、太陽系初期に存在した消滅核種である⁶⁰Fe (半減期150万年) から壊変した⁶⁰Ni 同位体過剰の検出にコンドライト隕石では初めて成功し、太陽系の初生⁶⁰Fe/⁵⁶Fe 比が分化した隕石から従来推定されていたよりも1桁以上高い10⁻⁶程度であることを明らかにしました。2003年に *Astrophysical Journal* のレターに発表された論文の重要な点は、星内原子核合成でしか作られない⁶⁰Fe の高

い存在度を説明するには超新星爆発に由来する成分が太陽系に付け加わった必要があることを示したことです。Frank Shu の提唱する X-wind モデルをもとに、²⁶Al や⁵³Mn など太陽系初期に存在した消滅核種は若い太陽が放出する高エネルギー粒子の核反応によって合成されたと主張する論文が多数出されていましたが、橘さんの研究から超新星爆発成分の寄与が重要であることが再認識され、宇宙化学だけでなく、天体物理学の元素合成理論等にも大きなインパクトを与えました。また、橘さんの論文が出される以前には⁶⁰Fe の太陽系初期の小天体内部熱源としての寄与は²⁶Al に比べ無視できるほど小さいと考えられていましたが、新しい初生同位体比を用いるとその効果は無視できない量となり、天体の初期分化モデルも見直しが必要になりました。さらに、橘さんの論文が発表されてから⁶⁰Fe-⁶⁰Ni 壊変系を利用した初期太陽系精密年代測定法が広く注目され、現在世界の複数の研究機関で隕石の精密 Ni 同位体分析が試みられています。

橘さんの研究の本領は実験岩石学のアプローチにあります。彼のユニークな点は天然試料の精密な同位体化学分析とコンドリュールの衝撃波加熱モデルや星内元素合成理論モデルが組み合わされていることです。その広い視野と知識の深さには常に驚かされ、私などはわからないことがあると、すぐに電子メールで橘さんに教えてもらいます。同じようなことをしている人は彼の周囲にはたくさんいるのではないかと思います。それ以上に私が驚かされるのは、彼は本来、精密同位体比分析用質量分析計などの機器分析を専門とする研究者ではないのに、アリゾナ州立大学ではSIMS 分析も習熟して誰もできなかった⁶⁰Ni の過剰を見つけました。さらに、操作の難しい産総研の大型SIMS (IMS-1270) も数日であっという間に使いこなしてしまいます。私が産総研に在職中に橘さんが初めて産総研のSIMS を使いにきた際、私はちゃんとセットアップをして測定手順を伝え、夜一人でも間違いなく測定できるようにお膳立てしましたが、橘さんは私には内緒でそれとは違う色々な測定の仕方を試しました。私の言う通りにしなかったから、必ずしもうまく言った訳ではありませんが、彼にとっては自分で理解することがまず大切だったようです。その後、私はアメリカへ行ってしまいましたが、橘さんは自力で難しい Ni 同位体比の分析を行うことができました。橘さんが高い能力を持つ優秀な若手研究者であることは言うまでもありませんが、一方で時間と労力を惜し

まない人であることも、これまでの業績に反映されているのではないかと思います。これから、どのような研究課題へ向かわれるのか、どんな楽しみな結果を出されるのか、期待しております。

木多紀子（ウィスコンシン大学マディソン校）

奨励賞：山本順司会員（京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設）

受賞題目：「マントル起源鉱物中の流体包有物を用いた沈み込み帯の物質循環系の研究」



山本順司博士は滋賀県彦根市のご出身で、現在は京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設で助手を務められています。ご実家からほど近い大学に職を得て、大変羨ましいことではありますが、

実際の勤務地は温泉で名高い大分県別府市に位置し、彼の研究室のデスクからは、遠く別府湾を望む素晴らしい景観が広がっています。

山本さんは高校卒業後、広島大学地球惑星システム学科に入学しました。彼が広島大学を選んだ大きな理由は、学内に HISOR と呼ばれる放射光の施設が建設されることを知ったため、と聞いています。大規模な実験施設を使って研究を行うことに大きな夢を抱いていたようです。残念ながら彼は HISOR の稼働を在学中に見ることはなかったようですが、地球科学の世界ではかなりの大型装置といえる超高分解能二次イオン質量分析計（SHRIMP）を広島大学に導入した佐野有司教授のもとで卒業研究を行うことになりました。

修士課程、博士課程は東京大学大学院理学系研究科地質学専攻に移り、兼岡一郎教授の指導の下で、マントル捕獲岩に含まれる希ガス同位体組成に関する研究を行いました。彼の博士論文のタイトルは「Investigation of the subcontinental mantle based on noble gas isotopes, petrological and spectroscopic studies of Siberian mantle xenoliths」ですが、題名の中の spectroscopic という言葉に目がとまるかと思います。私と彼との研究上の出会いは、彼が博士3年のときの夏にさかのぼります。マントル由来の物質に含まれるヘリウムの同位体比（ $^3\text{He}/^4\text{He}$ ）は大気の8倍ほどであると考えられています。これは放射壊変に寄与しない始源的な ^3He が地球内部に残っているからと解釈されています。ところが彼が調べたマントル捕獲岩からは大気よりもずっと低いヘリウム同位体比がみつ

かってしまったのです。分析したサンプルが本当にマントル起源かを証明せよ、ということが彼の学位審査の至上命題として下っていたと後日聞きました。当時、私たちの研究室では、ダイヤモンド中の流体包有物の残留圧力を分光学的に測定する研究をしておりました。彼から相談を受けたときには、ダイヤモンドではともかく、ずっと柔らかい珪酸塩で残留圧力を検出することは無理だろうな、と心の中では思いつつも、彼につきあって一緒に実験を始めることにいたしました。彼はねばり強く、実に多くの測定を極めて精密に行い、彼の試料がマントル起源であることを示しただけでなく、マントル内部での鉱物の変形挙動の差まで定量的に示すことに成功しました。最初から無理と思ってやらないのと、余計な先入観なしに好奇心に牽引されて研究に取り組むのでは大きな違いがある、と私が思い知った出来事でした。その後、東大、東工大、フランス Marty 博士のもとでのポスドク生活を経て、現在のポジションを得ましたが、研究への好奇心は相変わらず旺盛で、今でも私は彼から多くのことを学んでいます。

さて、研究者としては学ぶところばかりの山本さんですが、人となりにもふれておきましょう。山本さんは大変几帳面な性格で、いつも胸ポケットに A4 の紙を八つ折りにして、これからやらなければいけないことをリストアップして、済んだものからチェックマークを入れています。どうやらこの紙は毎日入れ替えているようで、TO DO リストは次から次へと入れ替わっているようです。また、地質出身ということもあり、十分な下準備をしてフィールドワークに出かけることも楽しみにしているようです。私も何回かおつきあいましたが、細かいことに気がつく彼との調査では、ストレスもなく、有意義な時間を過ごすことができました。地元でしか食べられない珍しいものを食べる、と言うのも彼のこだわりのようで、中国に出かけたときは蟬やら、サソリやらを一緒に食べるようになりました。蟬の味が一匹一匹違うということを、身をもって知ることができたのは彼のおかげです。

玄人好みのする腕の立つ研究者が地球化学の世界では高く評価される例も多くありますが、彼にとってはそのようなスタイルは魅力的ではないかもしれません。山本さんはどちらかと言えば目的追求型の研究者と言えます。知的好奇心を満たすためにあらゆる手段を講じて研究に取り組んでいくという意味です。これから彼がどこへ進み、どのような壁にぶつかり、そし

て何をつかむか、研究仲間として楽しみに見ていこうと思います。今後の益々の活躍を祈ります。

鍵 裕之（東京大学大学院理学系研究科）

●第1回地球化学会ショートコース報告

第1回日本地球化学会ショートコースを、今年の日本地球化学会年会に合わせ、日本大学にて開催致しました（2006年9月12日）。本ショートコースは、日本地球化学会将来計画委員会（委員長・蒲生俊敬）が計画したプログラムで、地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と、最先端研究に触れることによる視点の拡大を通じ、将来の地球化学を担う若手研究者（大学生・大学院生）の育成を目指す、という目標を掲げています。今年のプログラムは以下の通りで、49名（日本地球化学会会員26名、非会員23名）の参加者を迎えることができました。今回のショートコースは、参加者の経済的負担を考慮し、講義は午後1時開始となりました。そのため、講義は夜間（講義終了20時）にまでおよびました。途中の休憩は、夕食の時間（お弁当を支給しました）のみであり、タイトなスケジュールにもかかわらず、誰一人途中で抜け出すことなく、ほぼ満員の会場で、全員が最後まで熱心に講義に聞き入っていました。

第1回ショートコース プログラム（於・日本大学）
はじめに 13:00~13:10

「誰も眠ってはならぬ」 平田岳史（東工大院）

講義1 13:10~14:30

「同位体地球化学」 鈴木勝彦（JAMSTEC）

講義2 14:40~16:00

「有機地球化学」 奈良岡 浩（岡山大学）

講義3 16:00~16:30

「地球を見る」スライドショー

山本鋼志（名古屋大学）

講義4 16:40~18:00

「地球温暖化」 野尻幸宏（環境研）

夕食（弁当支給）

講義5 18:30~20:00

「プレゼンテーションはあなたの将来を決める」

松田卓也（神戸大学・名誉教授）

来年のショートコースをより充実したものとするために、参加者にアンケートをお願いしました。19名からアンケートが回収でき、積極的な意見を頂くことが



熱心に講義に聞き入る受講者

できました。来年度のショートコースを計画する上で参考にさせていただきます。また、ショートコースに関して、ご意見などございましたら、どんな小さなことでも構いませんので、下記連絡先までお知らせ頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本年のショートコースの講師を引き受けて下さった方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。また、実施にあたり日本大学の皆様に協力いただきました。また、最後になりましたが、会場設営や運営に際し東工大の学生諸氏の協力をいただきました。感謝の意を表したいと思います（東工大・平田岳史：hrt1@geo.titech.ac.jp）。

●鳥居基金助成実施報告

2005年度第2回「鳥居基金」助成実施報告（TE-48）

氏名（所属）：下田 玄（産業技術総合研究所）

助成：海外渡航（オーストラリア・メルボルン）

課題：第16回ゴールドシュミット会議

この度、日本地球化学会の鳥居基金海外渡航援助を受け、2006年8月27日~9月1日に開催された第16回ゴールドシュミット会議に参加し、学会発表を行いました。ゴールドシュミット会議は、アメリカとヨーロッパで交互に開催されている学会ですが、今回は、例外的にオーストラリアのメルボルン市にある Melbourne Exhibition and Convention Centre で開催されました。学会のホームページは <http://www.goldschmidt2006.org> です。このページから要旨をダウンロードすることが可能です。

ゴールドシュミット会議は世界各国より多くの研究

者が参加する、(広い意味での)地球化学分野の学会で、その規模は最大だと思います。セッションは、地球・惑星化学、海洋化学、大気化学、環境化学等、日本地球化学会で馴染みのあるテーマに関するものから、高压実験、計算機実験等、日本では他の学会で発表されるテーマのセッションまで幅広くあります。この広汎なテーマがゴールドシュミット会議の魅力の一つです。学会は5日間開催され、毎日12のセッションが、朝8時半から16時45分まで行われました。口頭発表に引き続き、ポスターセッションが18時まで行われました。ポスターは、学会期間中継続して展示されていたので、興味のあるポスターは全て見る事が可能でした。また、十分に議論をすることもできました。直前に起きたロンドンヒースロー空港での爆弾テロ未遂事件の影響で、ポスターが届かないこともあるらしく、「Thank you London Heathrow!」とのみ掲示されたポスターもありました。午前と午後のセッションの間には、Plenary Sessionが行われ、各賞の受賞者達が30分の講演を行いました。昼食は学会会場で提供されたので、食事場所を探す手間も無く、午後のセッションに遅刻することもありませんでした。

私は8月29日に行われた「Early Mantle Evolution」のセッションにおいて「REE and Nd isotopic composition of martian crust」という題目で口頭発表を行いました。シャーゴッタイトは、火星隕石の中で最も多様な同位体・化学組成をもっています。この多様性は、シャーゴッタイトマグマへの地殻物質の混合を示唆しますが、単純に議論することはできません。すなわち、濃度に関しては結晶分別作用の効果を評価する必要があります。また、混合した地殻が火星のグローバルな地殻(地球化学的貯蔵庫)なのか、ローカルな地殻を反映しているのかを議論しないと、見積もった地殻組成から火星の化学的進化を議論することはできません。しかし、これらの議論が十分に成されていないのが実情です。そこで、REEとNd同位体組成を用いて、地球化学的モデリングと岩石学的なモデリングを行い、両者を比較することで火星のグローバルな地殻の組成を見積もりました。また、この地殻組成と火星初期の化学的分化過程のモデルを組み合わせることで火星のマグマオーシャンの深さが約250 kmであることが見積もれました。学会ではこれらの結果について発表しました。今回の海外派遣で、学会発表を行い、国内では会うことのできない研究者と議論を行うことができました。また、数多くの最新

の研究成果を知ることができました。この経験は、今後の私の研究にとっても非常に意義深いものになると思います。渡航費助成を決定して下さった日本地球化学会と関係者各位に深く感謝しております。

2006年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-50)

氏名(所属): 田副博文(東京大学海洋研究所)

助成: 海外渡航(中国)

課題: 2006 Western Pacific Geophysics Meetingでの研究発表

日本地球化学会「鳥居基金」の海外渡航援助を受け、中国で開催されたWestern Pacific Geophysics Meetingに参加し、ポスター発表を行いました。学会は2006年7月24日から27日まで北京のBeijing International Convention Centerにおいて開催されました。WPGMは西部太平洋地域のAmerican Geophysical Union (AGU)とその関連学会の会員のために開催された学会であり、北京での開催は今回が初めてとなります。会期中の4日間とも朝8時30分から夕方の5時まで常時13ヶ所の会場で口頭発表が行われ、さらに平行してポスター発表でも活発な議論が行われました。各セッションではAtmospheric Sciences, Geodesy, Hydrology, Ocean Sciences, Seismology, Space Physics and Aeronomy, Tectonophysics, Volcanology, Geochemistry, and Petrologyに関する発表が行われました。また、国際共同GEOTRACES計画の関連セッションとして「Marine Biogeochemical Cycles of Trace Elements and Isotopes: from Regional to International Networks」が設けられ、12の口頭発表と12のポスター発表において最新の成果発表と活発な意見交換が行われました。

私は7月27日行われた「Marine Biogeochemical Cycles of Trace Elements and Isotopes: from Regional to International Networks」において発表を行い、演題は「同位体手法を用いた西部北太平洋におけるセリウムおよびネオジムの地球化学的研究 (Marine Geochemistry of Cerium and Neodymium Isotopic Compositions in the Western North Pacific Ocean)」でした。

本発表では西部北太平洋とその周辺海域の表面海水におけるセリウム及びネオジムの同位体比の分布を明らかにしました。両元素の同位体比は水塊のトレーサーとして非常に有用であると考えられていますが、これ

までに得られているデータは極めて少ないものです。しかし、セリウムはネオジムよりも海洋中での平均滞留時間が短く、水塊の移動をより詳細にとらえることができるかと期待されます。本発表では西部北太平洋表層におけるセリウム同位体比およびネオジム同位体比の分布を明らかにし、両同位体比分布が周辺の陸域およびその沿岸域からの影響を受けていることが明らかにしました。特に大陸沿岸の堆積物やニューギニア島など島弧火山の風化が重要な供給源となっています。セリウム、ネオジムともにそれら供給源の近海では顕著な同位体比の変動が観察されますが、表層海流とともに水平輸送されるネオジムに対し、セリウムは太平洋中央部で均一に大陸地殻由来の値が得られました。このことはセリウムがエアロゾルとして輸送される大気降下物の影響を受けている可能性を示唆しています。海洋粒子によって容易に除去されてしまうセリウムにとって、大気降下物からの溶出は無視できない重要な供給過程なると考えられます。

2006年度第1回鳥居基金助成報告 (TE-51)

氏名：大塚高弘（大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻）

助成：国内研究集会

課題：2006年度日本地球化学若手シンポジウム

地球化学若手会（地球化学に興味のある自称若手研究者の集まり）主催の「2006年度地球化学若手シンポジウム」が2006年10月7日(土)から3日間にわたって国立淡路青少年交流の家で開催されました。本シンポジウムは、地球化学に携わる若手研究者が分野を超えて活発に交流を行うことを基本理念として発展し、今回で28回目を迎えました。今年度は初の関西地方開催となり、地元、大阪大学を中心に北海道から九州まで全国13大学から48名の参加者が、2泊3日の合宿形式による濃密で白熱した議論・討論を行ないました。参加者の内訳は社会人7名、博士課程10名、修士課程22名、学部生9名と幅広い世代からバランスの取れたものとなりました。

3名の講師をお招きして行った招待講演では、最新の研究内容に加え、研究に対する姿勢や情熱など、これから研究の道に進まんとする若手への熱いメッセージをいただきました。独立行政法人産業総合研究所研究員の鈴木庸平博士には、岩石呼吸や放射性物質の処理と地下深部生物圏の関わりという最先端の話題につ

いてお話しいただき、広島大学の高橋嘉夫助教授からは「元素のスピン状態に基づく表層環境地球化学」と題しまして、研究のきっかけや手法の開発など幅広いトピックを通して研究者としてのあるべき姿を教えてくださいました。北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの柴田英昭助教授からは、森林生態系を通じた物質循環の話題を中心に生物地球化学の分野を実際の研究例を通して紹介していただきました。

また、10件行われた一般口頭発表では、発表者には10分の研究分野に関するレビューイントロを用意していただき、一度質問の時間を設け背景となる知識を身につけた後、さらに10分の研究発表をしていただくというスタイルをとりました。それぞれ積極的な質疑応答が行われ、活発な議論がわき起こりました。22件のポスター発表についても、飛び込みでの発表も加わり、どれだけ話しても時間が足りない！ という声が多数出るような熱のある発表が行われました。

若手の集まりに欠かすことができない懇親会は北海道大学の学生を中心に計画され、参加者を数グループにわけたグループ対抗の地球化学関連クイズなどで大いに盛り上がり、講師・社会人・学生と身分・分野に関係なく大勢の方と交流を深めることができました。シンポジウム終了後の午後には、北淡震災記念公園内野島断層保存館への見学会も企画され、約半数の21人の参加者が集まりました。参加者一同、阪神大震災という記憶に新しい地球の営みとその力の強大さを再認識させられる良い機会になったと思います。このように盛大に開催された日本地球化学若手シンポジウムですが、来年度の開催も決定しています。幹事に板井啓明さん（広島大）が立候補し、満場一致の承認を得ました。興味を持たれた方は是非ご参加下さい。当日おこなったアンケートの詳細やシンポジウムの様子を記録した写真やプログラムなどは地球化学若手会のウェブサイトに掲載しておりますので御覧下さい。

<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/>

最後に本シンポジウムの運営に関わったスタッフを紹介させていただきます。伊規須素子（東工大D2）、杉浦嘉一（兵庫県立大M2）・大久保智（北大M2）・津田久美子（神大D1）・石川弘真（東北大D2）です。本シンポジウム開催のための助成を採択していただきました日本地球化学会に深く感謝いたします。ありがとうございました。

●2006年度日本地球化学会総会報告

日時：平成18年9月14日 14:00～15:15

場所：日本大学百周年記念館ホール

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 松田准一会長
4. 大会委員長挨拶 永井尚生委員長
5. 学会からの報告など
 - 1) 2005年度事業報告および決算報告ならびに監査報告
 - 2) 2006年度事業中間報告および決算中間報告
 - 3) 2007年度事業計画および予算案
 - 4) その他
 - (4-1) Goldschmidt 2006メルボルン会議の報告と、2007ケルン会議の紹介
 - (4-2) 地球化学ショートコースの実施
6. 会場からの意見・提案など
7. 2006年度日本地球化学会柴田賞および日本地球化学会賞ならびに日本地球化学会奨励賞授賞式
 - 1) 奨励賞

高野淑識会員「海底熱水系における生物―地質相互作用の解明に関する研究」

橘 省吾会員「消滅核種⁶⁰Fe 初生存在度に基づく初期太陽系誕生・進化に関する研究」

山本順司会員「マントル起源鉱物中の流体包有物を用いた沈み込み帯の物質循環系の究明」
 - 2) 学会賞

坂本尚義会員「酸素同位体局所精密分析法の開発とそれを用いた太陽系初期の酸素同位体不均一に関する研究」
 - 3) 柴田賞

杉崎隆一会員「地球化学的手法によるテクトニクス場と地下深部の研究」
8. 閉会宣言

2005年度事業報告（2006年9月14日）

1. 会員状況（2005.1～2005.12）

	正会員	（一般）	（学生）	（シニア）	賛助	名誉	計	海外会員
2004.1	942	(816)	(115)	(11)	12	13	967	33
入会	37	—38	(22)				37	4
退会	—47	(—38)	(—10)	(—1)		—1	—50	—2
除名	—25	(—19)	(—6)				—25	—2
変更		(—3)	(—24)	(27)			0	3
2004.12	905	(771)	(97)	(37)	12	12	929	36

2. 年会、委員会等開催

2005年度地球惑星科学関連学会合同大会（5/22～26；千葉、幕張メッセ国際会議場）、ゴールドシュミット2005（5/20～25；米国アイダホ州）、年会（9/26～28；琉球大学）、総会（9/27；琉球大学）、日本地球化学会公開講演会「サンゴ礁の海が語る地球環境」（10/1；那覇市、自治会館）、評議員会3回（2/12, 6/11, 9/25）、幹事会3回（2/5, 6/4, 9/17）、GJ編集委員会4回、地球化学編集委員会1回、学会賞等受賞者選考委員会1回、鳥居基金委員会2回、名誉会員推薦委員会1回、将来計画委員会2回、地球化学講座編集委員会2回、役員選挙管理委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal：Vol. 39（1～6）

地球化学：Vol. 39（1～4、特別号）

4. ニュース発行 No.180（3/15）、181（5/15）、182（8/15）、183（12/15）（「地球化学」と合本）
5. 地球化学講座「第1巻 地球化学概説」「第5巻 生物地球化学」発行
6. 日本地球化学会賞等の授与（学会賞1件、奨励賞3件）
7. GJ 賞授与（米国 アイダホ州モスコ）
8. 鳥居基金助成 第1回海外渡航2件（うち1件辞退）、国内研究集会1件、第2回海外渡航2件
9. 2006～2007年度学会役員選挙の実施
10. GJ, 地球化学, ニュースならびに会員名簿バックナンバー（2003まで）の製本・保管
11. 学会などの共催3件、協賛2件、後援3件
 - ・「第53回質量分析総合討論会」（5/25～27；さいたま市大宮ソニックスティ）共催
 - ・「第43回原子力総合シンポジウム」（5/26～27；東京・日本学術会議講堂）共催
 - ・「第11回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」（6/16～18；千葉・市川市文化会館）後援

- ・「第42回アイソトープ・放射線研究発表会」(7/6～8; 東京・日本青年館) 共催
- ・「第13回国際粘土学会」(8/21～27; 東京・早稲田大学) 協賛
- ・「トレーサーを用いた水循環研究の現状と将来」(9/9; 東京・日本学術会議会議室) 後援
- ・「日韓合同陸水シンポジウム」(9/16～18; 大阪国際交流センター) 後援
- ・「日本地球化学会平成17年学術講演会」(11/18～20; 東北大学) 協賛

2006年度事業中間報告(2006年9月14日)

1. 会員状況(2006年6月30日現在)

	正会員	(一般)	(学生)	(専攻)	(シニア)	賛助	名誉	計	外国会員
2004.12.31	905	(771)	(97)	(0)	(37)	12	13	929	36
入会	42	(10)	(16)	(16)				42	2
退会	-9	(-7)	(-2)	(0)		-1		-10	
変更除名		(6)	(-10)	(1)	(3)				2
2005.8.31	938	(780)	(101)	(17)	(40)	11	12	961	40

2. 年会, 委員会などの開催

日本地球惑星科学連合2006年大会(5/14～18; 千葉, 幕張メッセ国際会議場), ゴールドシュミット2006(8/20～25; オーストラリア・メルボルン), 年会(9/13～15; 日本大学), 総会(9/14; 日本大学), 日本地球化学会公開講座「深海底から地球の未来を求めて・掘削船「ちきゅう」が開く海底の世界」(9/10; 日本大学文理学部百周年記念館), 評議員会3回(2/12, 6/10, 9/12), 幹事会3回(2/5, 6/2, 9/4), GJ編集委員会4回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 鳥居基金委員会2回, 名誉会員推薦委員会1回, 将来計画委員会2回, 地球化学講座編集委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 40(1～4)

地球化学: Vol. 40(1～3号)

4. ニュース発行 No. 184(3/15), 185(5/15), 186(8/15) (「地球化学」と合本)

5. ホームページのリニューアル(国際文献印刷へのサーバー移動)

6. 地球化学ショートコースの実施(9/12; 年会開催時)

講義1「同位体地球化学」

鈴木勝彦(JAMSTEC)

講義2「有機地球化学」

奈良岡 浩(岡山大学)

講義3「地球を見る」スライドショー

山本鋼志(名古屋大学)

講義4「地球温暖化」 野尻幸宏(環境研)

夕食(豪華弁当を用意)

講義5「プレゼンテーションはあなたの将来を決める」松田卓也(神戸大学・名誉教授)

7. 日本地球化学会賞等の授与(柴田賞1件, 学会賞1件, 奨励賞3件)

8. GJ 賞の授与(オーストラリア・メルボルン)

9. 鳥居基金助成 第1回(海外渡航2件(うち1件辞退), 国内研究集会1件), 第2回(海外渡航2件, 国内研究集会1件)

10. GJ バックナンバーの電子化(1～8巻)

11. 学会などの共催4件

・日本原子力学会「第44回原子力総合シンポジウム」(H 18. 1. 25)

・「第54回質量分析総合討論会」(H 18. 5. 14) 共催

・プラズマ核融合学会, 日本原子力学会「第6回核融合エネルギー連合講演会」(H 18. 6. 13～14)

・第50回粘土科学討論会(日本粘土学会)

2007年度事業計画(2006年9月14日)

1. 年会(岡山大学, 平成19年9月中の3日間)

2. 総会(岡山大学, 上記の年会中)

3. 日本地球惑星科学連合2007年大会(5/19～24; 幕張メッセ)

4. ゴールドシュミット2007(8/19～24; Köln, Germany)

5. 評議員会4回

6. 幹事会3回

7. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 41(1～6)

地球化学: Vol. 41(1～4, 特別号)

8. ニュース発行 No. 188～191

9. 「地球化学講座」の出版

10. 日本地球化学会賞等の授与

11. 鳥居基金助成2回

12. 学会などの共催等

13. 2008～2009年度学会役員選挙の実施

2005年度日本地球化学会決算報告（2005年1月1日～12月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	8,870,000		9,049,000	
(内訳) 一般正会員		7,665,000		7,942,000
学生正会員		535,000		565,250
シニア正会員		95,000		50,000
賛助会員		260,000		260,000
海外会員		315,000		231,750
2. 刊行物売上	4,363,800		4,363,800	
3. 広告料	1,172,000		1,550,000	
(内訳) 地球化学		940,000		
会員名簿		232,500		
4. 出版助成	5,400,000		5,900,000	
6. 公開発表助成	1,300,000		0	
7. 雑収入	407,435		50,000	
8. 前年度名簿積立金	500,000		500,000	
9. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
10. 前年度繰越金	17,121,544		11,720,291	
収入計	42,535,279		36,533,091	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費	20,115,023		16,010,000	
1.1 出版費		15,440,323		12,750,000
1.1.1 印刷費		12,170,436		9,850,000
1.1.2 編集費		2,270,000		2,250,000
1.1.3 発送費		999,887		650,000
1.2 行事費		496,000		450,000
1.3 公開発表助成		1,300,000		0
1.4 学会賞経費		84,378		40,000
1.5 委員会活動費		130,517		300,000
1.6 名簿積立金		0		0
1.7 名簿作成費		1,054,601		900,000
1.8 会員業務委託費		1,564,869		1,450,000
1.9 会員業務郵税		44,335		120,000
2. 管理費	1,616,522		2,000,000	
2.1 庶務費		250,000		150,000
2.2 会議費		88,509		100,000
2.3 通信費		106,050		150,000
2.4 旅費		639,000		1,000,000
2.5 選挙費		191,123		250,000
2.6 会計費		200,000		100,000
2.7 雑費		99,840		50,000
2.8 雑誌保管費		42,000		200,000
3. 予備費	182,700		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
6. 次年度繰越金	17,221,034		14,723,091	
支出計	45,535,279		36,533,091	

1.1. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	9,309,186	2,861,250	←	0	12,170,436
1.1.2 編集	1,750,000	350,000	150,000	20,000	2,270,000
1.1.3 発送	999,887	←	←	0	999,887
出版費計	12,059,073	3,211,250	150,000	20,000	15,440,323

英文誌：Geochemical Journal：Vol. 39, No. 1～6。

和文誌：地球化学：Vol. 39, 1～4（ニュース No. 176～179, 連絡会ニュース No. 30, 31を合本発行）。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

貸借対照表（2005年12月31日現在）

資産の部		負債・正味財産の部	
現金	6,215	前受会費	2,730,000
普通預金（会計）	1,325,731	基本財産充当引当金	3,400,000
定額貯金	7,600,000	正味財産（繰越金）	17,221,034
普通貯金	3,009,207	計	23,351,034
国際文献印刷郵便振替	9,591,530		
国際文献印刷みずほ銀行	1,818,351		
計	23,351,034		

2005年度鳥居基金決算報告（2005年1月1日～12月31日）

収入の部		支出の部	
科目	金額（円）	科目	金額（円）
1. 前年度繰越金	4,076,943	1. 助成	400,000
2. 普通貯金利子	95	内訳 助成100,000円4件	
3. その他	0	2. その他	0
収入計	4,077,038	3. 次年度繰越金	3,677,038
		支出計	4,077,038

資産状況	
科目	金額（円）
普通貯金	1,677,038
定額貯金	2,000,000
資産計	3,677,038

2005年度ゴールドシュミット国際会議基金決算報告（2005年1月1日～12月31日）

収入の部		支出の部	
科目	金額（円）	科目	金額（円）
1. 前年度繰越金	3,382,351	1. 前年度繰越金	320,850
2. その他	0	2. その他	0
収入計	3,382,351	3. 次年度繰越金	3,061,501
		支出計	3,382,351

2006年度日本地球化学会中間決算（2006年1月1日～8月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	7,871,500		9,016,000	
(内訳) 一般正会員		6,990,000		7,771,000
学生正会員		451,500		498,750
シニア正会員		190,000		115,000
賛助会員		240,000		380,000
			海外会員	251,250
2. 刊行物売上	0		3,981,900	
3. 広告料	0		940,000	
(内訳) 地球化学	0			
会員名簿	0			
4. 出版助成	4,900,000		5,400,000	
5. 成果公開(B)	1,050,000			
6. 成果公開(C)	0			
7. 雑収入	39,960		50,000	
8. 前年度名簿積立金	0		0	
9. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
10. 前年度繰越金	17,221,034		14,343,091	
収入計	34,482,494		37,130,991	

支出の部

科目	支出額（円）		予算額（円）	
1. 事業費	7,339,447		17,860,000	
1.1 出版費	4,001,616		15,000,000	
1.1.1 印刷費	1,398,337		10,850,000	
1.1.2 編集費	2,171,053		2,250,000	
1.1.3 発送費	432,226		1,000,000	
1.1.4 電子化経費	0		900,000	
1.2 行事費	1,418,000		450,000	
1.2.1 年会など	368,000		450,000	
1.2.2 成果公開(B)	1,050,000			
1.2.3 成果公開(C)	0			
1.3 学会賞経費	62,685		40,000	
1.4 委員会活動費	39,200		300,000	
1.5 名簿積立金	500,000		500,000	
1.6 名簿作成費	0		0	
1.7 会員業務委託費	1,310,336		1,450,000	
1.8 会員業務郵税	7,610		120,000	
2. 管理費	1,775,924		2,950,000	
2.1 庶務費	0		150,000	
2.2 会議費	118,229		100,000	
2.3 通信費	0		50,000	
2.4 旅費	1,074,040		1,000,000	
2.5 選挙費	0		0	
2.6 会計費	100,000		100,000	
2.7 雑費	126,655		50,000	
2.8 ホームページ費用	357,000		1,300,000	
2.9 雑誌保管費	0		200,000	
3. 予備費	0		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. 次年度繰越金	0		12,520,991	
支出計	12,515,371		37,130,991	

1.1. 出版費明細

	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	1,398,337	←	0	1,398,337
1.1.2 編集	1,750,000	350,000	71,053	0	2,171,053
1.1.3 発送	432,226	←	←	0	432,226
出版費計	2,182,226	1,748,337	71,053	0	4,001,616

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2007年度日本地球化学会予算（2007年1月1日～12月31日）

収入の部

科目	2007年予算額（円）		2006年予算額（円）	
1. 会費収入	8,304,000		9,016,000	
1.1 一般正会員		7,020,500		7,771,000
1.2.1 学生正会員		456,000		498,750
1.2.2 学生正会員(修士バック)		52,500		0
1.3 シニア正会員		200,000		115,000
1.4 賛助会員		260,000		380,000
1.5 海外会員		315,000		251,250
2. 刊行物売上	3,981,900		3,981,900	
3. 広告料	1,172,500		940,000	
3.1 地球化学		940,000		940,000
3.2 会員名簿		232,500		0
4. 出版助成	4,900,000		5,400,000	
5. 雑収入	50,000		50,000	
6. 前年度名簿積立金	500,000		0	
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000		3,400,000	
8. 前年度繰越金	12,520,991		14,343,091	
収入合計	34,829,391		37,130,991	

支出の部

科目	2007年予算額（円）		2006年予算額（円）	
1. 事業費小計	17,060,000		17,860,000	
1.1 出版費		13,650,000		15,000,000
1.1.1 印刷費		10,850,000		10,850,000
(GJ)		8,000,000		8,000,000
(地化)		2,850,000		2,850,000
1.1.2 編集費		1,500,000		2,250,000
(GJ)		1,250,000		1,750,000
(地化)		250,000		350,000
(ニュース／HP) #		0		150,000
1.1.3 発送費		1,000,000		1,000,000
1.1.4 電子化経費		300,000		900,000
1.2 行事費		450,000		450,000
1.3 学会賞経費		40,000		40,000
1.4 委員会活動費		300,000		300,000
1.5 名簿積立金		0		500,000
1.6 名簿作成費		1,050,000		0
1.7 会員業務委託費		1,450,000		1,450,000
1.8 会員業務郵税		120,000		120,000
2. 管理費小計	2,140,000		2,950,000	
2.1 庶務費		150,000		150,000
2.2 会議費		100,000		100,000
2.3 通信費		50,000		50,000
2.4 旅費		1,000,000		1,000,000
2.5 選挙費		250,000		0
2.6 会計費		100,000		100,000
2.7 雑費		50,000		50,000
2.8 ホームページ費用		400,000		1,300,000
2.9 雑誌保管費		40,000		200,000
3. 予備費	400,000		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. 次年度繰越	11,829,391		12,520,991	
支出計	34,829,391		37,130,991	
実収入＊	18,408,400		19,387,900	
実支出＊＊	19,600,000		20,710,000	
差引	-1,191,600		-1,322,100	

＊実収入：収入計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

＊＊実支出：支出計から繰越金，基本財産引当金，名簿積立金を除いたもの。

2007年度のための措置

学会からのお知らせ

●「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」2007年度受賞候補者推薦の募集

応募期限：2007年1月31日(水)

日本地球化学会規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照の上、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を、自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

候補者の資格

- (柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。
- (学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。
- (奨励賞) 地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は2007年4月1日において満35才未満である(誕生日が1972年4月2日以降である)ことを要する。
- (功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し寄与のあった者または団体。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を**2007年1月31日(水)**までに庶務幹事へ提出する(消印有効)。

提出先：植田千秋(庶務幹事)

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
Tel：06-6850-5798, Fax：06-6850-5480
E-mail：shomu@geochem.jp

推薦の形式は、会員名簿(2005年度版)のハンドブック(71ページ)に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。この件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(上記)までお願いします。

●2007年度第1回鳥居基金助成の募集

2007年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは2007年1月末日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2007年4月から2008年3月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

申請手続

応募者は、Vol.39特別号(会員名簿)の89、90ページに掲載されている申請書(1)―Aまたは(1)―Bを所定の期日までに下記に提出する。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)を添付してください。なお、海外渡航により国際学会等での研究発表を行なう場合は、申請書の「研究の目的」欄に、渡航にあたっての抱負や発表する論文の内容・重要性などを記載して下さい。

提出先：植田千秋(庶務幹事)

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
Tel：06-6850-5798, Fax：06-6850-5480
E-mail：shomu@geochem.jp

●HPへの大学院入試情報の掲載開始

地球化学会、日本語ホームページの「お知らせ」の中に、新たに「大学院入試情報」の項目を作り、各大学の大学院入試日程・ホームページアドレスなどの掲載を開始いたしました。

<http://www.geochem.jp/information/exam.html>

必要事項を news-info@geochem.jp にご連絡いただきましたら、数日以内に掲載を致します。ドシドシと情報をお寄せください。

学会評議員会議事録

●2006年度第2回

日時：2006年6月10日(土) 13:00~17:00

場所：学士会分館(本郷)

出席者：松田准一会長、蒲生俊敬副会長、赤木右、中井俊一、平田岳史、益田晴恵、山本鋼志、植田千秋(以上幹事)、天川裕史、岩森光、海

老原充, 千葉仁, 永井尚生, 張 勁, 日高洋,
南雅代, 村松康行, 柳沢文孝 (以上評議員)

1. 2006年度第1回評議員会議事録を承認した。

2. 報告事項

2-1 庶務 (植田幹事): 【科学研究費補助金】(文部科学省) 平成18年度科学研究費補助金研究成果促進費 (研究成果公開促進費) 「研究成果公开发表(B)」(日本地球化学公開講演会・深海底から地球の未来を求めて・掘削船「ちきゅう」が開く海底下の世界) 交付内定・交付申請および交付決定 (1,050千円; 4.1, 4.23); (日本学術振興会) 平成17年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) (GJ) 交付内定・交付申請 (4,900千円; 5.11)。【研究助成等】2006年第1回鳥居基金助成, 山下洋平 (TE-49; 辞退)・田副博文 (TE-50)・大塚高弘 (TE-51) 各会員に交付手続 (3.21)。【後援・共催等】共催: 第50回粘土科学討論会 (日本粘土学会)。【庶務その他】科研費審査員候補者情報を学術振興会に登録 (2.23)。【幹事会】2006年6月3日 13:00~大阪市立大学文化交流センター 第2回評議員会の議事内容について整理した。(出席: 松田・蒲生・中井・平田・赤木・益田・山本・植田の各幹事)

2-2 編集

2-2-1 GJ (赤木幹事): Geochemical Journal の出版状況 (Vol.40 No. 1 を2月上旬に単独発送, No. 2 を4月上旬に地球化学と同時発送, No. 3 を地球化学と同時に6月上旬発送された。なお, 平成16年度には, 101件の投稿があり, そのうち39件受理, 37件却下, 2件辞退, 33件が審査中であること, 今年度今日までに36件の投稿があった旨報告された。また, 海外投稿者への pdf の無料頒布について, 海外の投稿者からの購入意欲を調査中である旨, 報告された。

2-2-2 地球化学 (益田幹事): 【出版状況】40巻第1号を3月に発行した。第2号は5月末に印刷を終了した。第3号は炭酸塩 (総説と原著論文を合わせて8編) を8月初旬に発行予定。【編集状況】1月はじめから5月26日までに投稿された論文は, 受賞記念論文3編 (全て40巻2号に掲載済み), 原著論文8編 (うち一件は電子投稿), 総説3編 (うち一件は却下), 昨年からの持ち越しが1件あり, 現在10編を編集作業中 (うち3編は近日中に受理される見込み)。【その他】電子投稿について: 5月にニューズメールで流すことを前提に, 電子メールで編集会

議を行い, 電子投稿規定案を作成した。この案を評議員に回覧し, 寄せられた意見に基づいて改定した仮投稿規程を, 5月はじめのニュースで流した。今後の予定: GJ と共通性の高い投稿規程を目指してすでにある規程を見直し, 統一した規定を作成する。改訂した投稿規程は41巻第1号に掲載する。このために, 年会時に行なう編集委員会で投稿規程の見直しに関する議論を行なう。

2-2-3 ニュース・HP (山本幹事): ニュース No.184 は地球化学 Vol.40 No. 1 に綴じ込みで, 3月末に発行済み。No.185は6月上旬発行予定 (年会のお知らせその2を含む)。No.186は2006年会のプログラムを掲載し, 8月上旬に発送の予定。No.184 から「院生による研究室紹介」「女性研究者に聞く」を掲載中である。ニュース電子メール版を随時送信 (前回評議員会以降2006 No.19~54を配信6月8日現在; 学会からのお知らせ12件, シンポジウム等の案内8件, その他案内4件, 人事公募8件, 各賞応募案内3件, 訃報1件)。4月1日から, 新しいホームページを公開し, 随時新情報を掲載している。GJ ホームページで全ての巻・号の論文について, キーワード検索が可能になった (3月)。また, テラ学術出版 GJ ホームページから, ウェブ投稿ができるように設定した (4月)。

2-3 行事

2-3-1 松田会長より, 日本地球惑星科学連合2006年大会は, 参加者数3,754名, 投稿数2,725件, 開催セッション109, 団体展示32ブース, 書籍出版展示17件, 大学インフォメーションパネル8大学, 会合62件であったこと, また, 会期中の学会ブースでの活動 (地球化学講座の販売等) について報告があった。

2-3-2 平田行事幹事より Goldschmidt 2006の準備状況 (GJ 授賞式, GJ パンフレットの配布, 学会ブースの設置など) について, 報告があった。

2-4 各種委員会 (蒲生選考委員長): 【鳥居基金選考委員会】2006年第1回鳥居基金助成, 山下洋平・田副博文・大塚高弘各会員に交付決定した。しかし, 山下会員は他機関からの海外渡航費用援助の採用が決定したため, 辞退の申し出を受けた。

2-5 日本地球惑星科学連合関係 (学術会議関係)

2-5-1 第3回評議会報告 (松田会長): 日本農業気象学会, 生命の起原および進化学会, 生態工学会の3学会が加盟したこと, 2006年度大会の報告, 2005年

度財務報告，日本学術会議から3つの分科会「地球惑星圏」，「地球人間圏」，「国際」が発足，第2回の連携会員を選考中であること，次期議長として，地球電磁気・地球惑星圏学会本蔵会長が選出された旨報告があった。

2-5-2 国際委員会報告（佐野委員）：AOGSと同様にEGUとも，連携していくことを検討している旨報告があった。

2-5-3 地学教育委員会（瀧上委員）：教育課程小委員会，地学教育小委員会に加え，新たに教員養成等検討小委員会（仮称）が立ち上がった。学習指導要領改定時期が迫っていることから，日本地球惑星科学連合として義務教育段階の教育についての提言「すべての児童・生徒が学ぶべき地球人の科学リテラシー」提出を行うために教育問題検討委員会と運営会議とで検討中との報告があった。

2-5-4 男女共同参画推進委員会（天野委員）：同委員会準備会での検討の結果，委員会正式立上げ及び男女共同参画学協会連絡会への加盟申請の提案をする旨報告があった。

2-6 2006年度年会について（永井評議員）
年会日程の確定（含公開講演会），ポスター賞の設立，参加登録費・懇親会費等の額の決定，講演申込はwebからのみ受付けること，支払い方法をCredit cardによる銀行決済のみで行なう事などが報告された。

年会HPの運用が開始されたこと等が発注されたことが報告された。

3. 審議事項

3-1 滞納会員の扱いについて（中井幹事）

9月の第3回評議員会で，3年と2年の滞納会員を除名する予定であったが，2年の滞納会員については，今年末までの振り込み状況を確認した上で，来年の第1回評議員会の議を経て除名することとした。

3-2 会員の異動（中井幹事）

平成18年2～5月の会員の以下の異動を承認した。

【入会退会の承認】

【入会】

（3月）

学生会員

9282378 佐藤寿年 サトウヒサトシ
筑波大学大学院生命環境科学研究科

地球進化科学専攻

（4月）

一般会員

9282381 伊藤政美 イトウマサミ
国土交通省関東地方整備局
関東技術事務所品質調査課水質試験
9282388 渡部慎一 ワタナベシンイチ
ライオン株式会社研究開発本部
リビングケア研究所

学生会員

9282389 宮川千絵 ミヤカワチエ
大阪大学大学院理学研究科
宇宙地球科学専攻松田研究室

修士バック

9282379 齊藤友比古 サイトウトモヒコ
東京大学大学院理学系研究科
地球惑星科学専攻

9282382 賞雅朝子 タカマサアサコ
東京大学理学系研究科
地球惑星科学専攻中井研究室

9282384 嶋本洋子 シマモトヨウコ
広島大学理学研究科
地球惑星システム学専攻
表層環境地球化学研究室

（5月）

一般会員

9282392 畠山史郎 ハタケヤマシロウ
独立行政法人国立環境研究所
アジア自然共生研究グループ
アジア広域大気研究室

9282395 堀江憲路 ホリエケンジ
独立行政法人国立科学博物館
理工学第三研究室
日本学術振興会特別研究員

学生会員

9282391 伊藤美穂 イトウミホ
大阪市立大学理学研究科
生物・地球系専攻地球物質1研究室

修士バック

9282385 吉野 徹 ヨシノトオル
東京大学大学院理学研究科
地殻化学実験施設野津研究室

9282394 荒川 雅 アラカワマサシ
東京大学大学院理学研究科

地殻化学実験施設野津研究室

【退会】

(2月)

一般会員

7280984 島 正子

(4月)

一般会員

7281433 関 陽児

【変更】

(3月)

会員番号	会員名	変更前	変更後
6282172	仙田量子	学生会員	一般会員
6282246	齋藤裕之	学生会員	一般会員
9282171	山比羅 守	学生会員	一般会員
281926	伊藤元雄	一般国内	一般海外

(4月)

会員番号	会員名	変更前	変更後
1282069	藤谷直樹	学生会員	一般会員
4282284	若狭 幸	学生会員	一般会員
9282363	山本征生	学生会員	一般会員
1280726	吉岡龍馬	一般会員	シニア会員
2280730	吉田栄夫	一般会員	シニア会員
9280322	宮崎 章	一般会員	シニア会員
6281850	横山哲也	一般国内	一般海外

2006年5月31日現在の会員数

	正会員	(一般)	(学生)	(修士バック)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	海外会員
2006/1/31	907	(773)	(96)	(1)	(37)	11	12	930	37
入会	12	(4)	(3)	(5)					
退会	-2	(-2)							
変更	0	(3)	(-6)		(3)				2
2006/5/31	917	(778)	(93)	(6)	(40)	11	12	940	39

3-3 平成17年度決算について(山本幹事が代理)

2005年度の収入・支出に関する決算報告を行った。正会員の減少、GJ出版助成の減額などの諸問題が会計に及ぼす影響について、総括がなされた。2005年度の会計決算の承認は、監査の後第3回評議員会で行う。

3-4 テラとの覚書について(赤木幹事)

TERRAPUBとの覚書について、発行部数を変更する旨提案があり、これを承認した。

3-5 2006年度 学会賞等受賞者の選考について

海老原委員長から、柴田賞に杉崎隆一会員、学会賞に坂本尚義会員、奨励賞に山本順司会員、高野淑

識会員、橋省吾会員を候補者とする報告を受け、評議員会で承認した。

3-6 2008年度開催地について(平田幹事)

従来からの慣例に従って、東京近辺の大学で開催される可能性が検討された。

3-7 将来計画委員会からの提言

蒲生委員長より、年会におけるショートコース実施案の最終確認がなされたこと、学会として大規模な研究費を申請する可能性について検討されたことが報告された。また、会員数減少への対策として、終身会員制度の設置を検討している旨報告があった。前年度の将来計画委員会からの積み残しであった中国語パンフレットを作成することを再確認した。また、英語パンフレットの改訂版作成を開始することを承認した。

3-8 2006年度年会ショートコースについて(平田幹事)

将来計画委員会から提出された案に基づいて、ショートコースを実施することが承認された。

3-9 今後の幹事会・評議員会の日程

2006年度 第3回幹事会：9月2日(土)

東京大学・山上会館(午後1時～、変更の可能性もあり)

2006年度 第3回評議員会：9月12日(火)

日本大学(午後4時～)

2006年度 日本地球化学会総会：9月14日(木)

日本大学



学会・研究会などのお知らせ

日本地球惑星科学連合2007年大会

1990年の地球惑星科学関連学会大会から数えて18回目になります。2007年連合大会は、高度に専門化された諸研究分野の成果の上に成り立つ総合科学としての「地球惑星科学」の研究発表の場、情報交換の場として、いっそう充実したものになるよう期待しております。

期間：2007年5月19日(土)～24日(木) 6日間
会場：幕張メッセ 国際会議場（千葉県）
＊＊詳細は大会ホームページ <http://www.jpгу.org/meeting/>をご覧ください。

皆様のご参加，ご提案を心よりお待ちしております。

ご不明な点は，ご遠慮なく下記事務局まで御問合せください。

〈日本地球惑星科学連合事務局〉

Tel：03-6914-2080, Fax：03-6914-2088

E-mail：office@jpгу.org

URL：http://www.jpгу.org/

ゴールドシュミット国際会議2007

17th Annual Goldschmidt Conference,

Goldschmidt 2007- "atoms to planets"

August 19-24, 2007

University of Cologne, Cologne, Germany

The Goldschmidt Conference is the premier annual meeting in geochemistry. The 17th annual meeting will be held in August 2007 at the University of Cologne in Germany and will be in association with the Annual Meeting of the German Mineralogical Society. This will be the second German Goldschmidt, after the 1996 meeting in Heidelberg.

The Organizing Committee and the International Program Committee have been working on making the scientific content of the meeting the most exciting yet. 16 broad themes have been selected covering the full range of geochemical research, from the formation of the solar system to environmental research, and from biogeochemistry to mineralogy. Details of these themes and the names of the members of the International Program Committee responsible for them are given on the Symposia page. The committee members will organize several symposia for each of the themes. Suggestions for symposia or ideas for general symposia should be ad-

ressed to the IPC members responsible for the relevant theme as soon as possible, or sent to the chair of the IPC (Herbert Palme, herbert. palme at uni-koeln. de).

Cologne is a great place for a large meeting. Cologne is served by two airports, and is the hub of low-cost flights in the region; it also has excellent rail connections to cities all over Europe. The University is one of the largest in Germany and we have booked central facilities that can accommodate the 2000 or more delegates who we hope will join us next August. Added to this, as the Romans discovered 2000 years ago, this city on the Rhine is a great place to visit. It attracts millions of visitors each year looking to take a vacation in Cologne and explore the city and its region.

All those who attended the 2005 Goldschmidt Conference will automatically receive the circulars for Goldschmidt 2007. However, if you did not attend this meeting and are not already on the Goldschmidt mailing list, you can add your address to the list to make sure you receive all the conference information as it becomes available. Simply type your email address into the box below, and press the button (<http://www.goldschmidt2007.org/contacts.php>)

As in previous years, the science base of the meeting should make it a cannot-miss event. Whether you combine the meeting with a vacation or not, we hope you will join us to enjoy Goldschmidt 2007 in Cologne next August. If you have not been to a recent Goldschmidt, simply add your email address to the mailing list via the conference website.

Herbert Palme, Albrecht Hofmann,
Carsten Munker, Sumit Chakraborty
for Goldschmidt 2007

(Reprinted from homepage of Goldschmidt 2007:
<http://www.goldschmidt2007.org/contacts.php>)



人事公募

九州大学理学研究院地球惑星科学部門教授・1名

1. 職種・人員：太陽惑星系物質科学講座担当教授
1名
2. 専門分野：物質進化地球化学〔有機物、固体地球、宇宙、同位体、大気、環境等に関する地球化学を研究し、かつ教育に熱意のある方を希望します。太陽惑星系物質科学講座では、宇宙や地球環境で物質（有機物、無機物）が全体として進化していくという視点に立つ新規の研究分野の設置を予定しています。〕
3. 着任時期：平成19年4月以降（決定後なるべく早い時期）
4. 提出書類：
 - (1) 履歴書
 - (2) これまでの研究概要（A4用紙2枚以内）
 - (3) 研究業績リスト〔原著論文（査読の有無）、総説、報告書、著書に区分〕
 - (4) 主要論文の別刷3編（研究業績リストに○印を付す）
 - (5) 研究・教育に対する抱負（A4用紙2枚以内）
 - (6) 応募者について意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係
5. 公募締切：平成19年1月31日(水)（必着）
6. 書類送付先および問い合わせ先：

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門
太陽惑星系物質科学講座担当教授候補者選考委員会
委員長 赤木 右
Tel：092-642-4187（ダイヤルイン）、
Fax：092-642-4187
E-mail：akagi@geo.kyushu-u.ac.jp
7. その他：
 - (1) 提出書類のうち、(4)以外は全てA4用紙を使用すること。
 - (2) 封筒に「応募書類在中」と朱書し、簡易書留で郵送のこと。
 - (3) 選考の最終段階において講演をお願いし、面接を行います。
 - (4) 男女共同参画社会基本法（平成11年法律第78

号）の精神に則り、教員の選考を行います。



院生による研究室紹介 No.4

広島大学大学院理学研究科

地球惑星システム学専攻

表層環境地球化学研究室

光延 聖

第4回目の「院生による研究室紹介」は広島大学大学院博士課程後期2年の光延（みつのぶ）が担当させていただきます。広島大学の地球惑星システム学専攻には地球化学系の研究室として同位体地球惑星科学研究室（日高洋教授、寺田健太郎助教授）と表層環境地球化学研究室があります。今回は私が所属しています表層環境地球化学研究室を紹介いたします。

表層環境地球化学研究室のメンバーは、清水洋教授と高橋嘉夫助教授の2名のスタッフと博士研究員1名、大学院生9名、学部生4名の総勢16名（2006年10月現在）で構成されています。少し前までは構成員の女性の割合が高かったのですが、最近ではめっきり減ってたくましい研究室になってしまいました。

研究室の特徴としては、専攻内で最も若い研究室（研究室設置から9年目）であるということが挙げられます。それもあってか、やりたいことはやらせてもらえる自由度の高い活発な研究室だと思います。研究テーマとしては、様々な微量元素の地球表層での物質循環を考察する上で重要なファクターとなる‘存在状態の決定（スペシエーション）’をキーワードとして、毎年新しい研究分野に果敢に挑戦しています。また、地球惑星系の専攻の中では環境化学的なテーマが多いのが特徴の1つといえるでしょう。環境化学的な研究はともすると分析化学の延長のようになりがちですが、本研究室ではサイエンティフィックにもおもしろく、環境汚染物質の挙動を支配するメカニズムに迫れるような研究をモットーとしています（写真1）。

研究室には主力の分析機器として無機定量分析用の四重極型 ICP-MS が設置されています。ICP-MS にはレーザーアブレーションシステムや高速液体クロマトグラフィー（HPLC）がジョイントされており、溶

液試料の定量だけでなく、固体試料の定量や同じ元素でも溶存状態ごとの定量などが可能です。その他、スズやイオウの揮発性物質分析用の GC-FPD や γ 線スペクトルを得るための Ge 半導体検出器などがあります。後者は、広島大学内のラジオアイソトープ施設における放射性トレーサーを用いた室内実験に使用します。また近年、研究テーマとして大きなウェイトを占めてきているのが SPring-8 (兵庫県佐用郡) や Photon-Factory (つくば市) などの大型放射光施設を使用した実験です (写真2)。ここでは主に X 線分光法を用いて元素の存在状態 (価数, 局所構造) を決定することができます。非破壊直接分析であり元素選択性が高い分析手法ですので混合物である地球化学・環境化学的試料に対しても大きな威力を発揮します。

では具体的に最近どのようなことについて研究を進めているのかについて紹介します。研究室のテーマは多岐にわたっているのですが簡単に説明するのは難しいですが、まず、大きなテーマとして X 線吸収分光法の 1 つである XAFS 法による固相中の微量元素のスペシエーションが挙げられます。XAFS は、ある特定の元素に着目し、その元素のまわりの構造や、どういう化学状態にあるかを調べる方法です。これを使って酸化還元環境の変動に伴って価数および動態が変化するヒ素、アンチモン、セレンなどの有害元素の化学状態と溶出-吸着機構の関係について研究を行なっています。また、エアロゾル中のイオウの存在状態や酸性雨の原因となる硫酸のエアロゾル中での中和機構などを観察しています。これまでの研究からエアロゾル中のイオウは硫酸塩で存在しており、また季節や粒径によってエアロゾル中の硫酸塩の種類が変化することが *in situ* に観察されています。(さらに最近の研究から黄砂期試料と非黄砂期試料の比較から、エアロゾルが硫酸を中和する能力が黄砂期には高まることがわかってきています。) さらに、時間分解 XAFS 法を用いた固液界面の化学反応解析や高感度な蛍光分光 XAFS 法を用いた極微量元素のスペシエーションなど、通常の XAFS 法を発展させた手法の開発も行っています。

次に、天然有機物質の 1 つで微量元素の環境動態に大きな影響を与えている腐植物質やバクテリア表面との希土類元素 (REE) や環境ホルモン物質の相互作用についても研究しています。REE の存在状態によって多様に変化する REE パターンの形状を使って



写真1. 海洋堆積物のサンプリングの様子



写真2. SPring-8での実験の様子

様々な官能基をもつ腐植物質やバクテリアのどんなサイトとどのような構造を持ち結合しているのかを考察しています。これらの室内実験結果を天然試料にトレースし REE パターンを海水中での REE の結合サイト推定や、バクテリア生成鉱物の指標として応用できることがわかってきています。

また、放射性トレーサーを用いた天然模擬実験により、地球表層での微量元素の移行挙動を支配する種々の因子について研究を進めています。特に岩石間隙水中での元素の拡散現象や錯生成時の元素の拡散挙動に対して応用し新しい知見を得ています。また、基礎的な地球化学のプロセスが未解明なレニウム (Re)、オスミウム (Os) についても放射性トレーサーを利用し、海洋での固液分配に関する研究を行なっています。Re および Os の地球化学的挙動は Re-Os 壊変系への応用など地球化学的に非常に重要であり、得られた知見は近々に発表予定です。というふうに、いくつか研究室で現在進めている研究テーマについてトピッ

ク的に紹介しましたが、非常に多岐にわたる研究を進めていることがわかっていただけたかと思います。これらの研究のひとつひとつを深く掘り下げて質の高い研究を行なうことがこれからの大きな目標です。

他に研究室全体の活動として週に一回、セミナーで個々の研究進捗状況の発表や関連する論文の紹介等を行っています。セミナーでは毎回様々な研究分野の話が聞けるので非常に新鮮です。一方で、理解するのにも一苦労なのですが（笑）、自身の研究のヒントになることも少なくなく、視野を広げることに役立っています。また、興味を持った分野について知識を深める少人数形式の自主ゼミも随時立ち上がっています。

また、専攻内で年に一回開かれるソフトボール大会（通称：ハンマー祭）では研究室一丸となって熱く燃えます（写真3）。初めて見た人が引いてしまう（？）くらい熱血な高橋先生とそれに従順に従う学生達という美しい構図が見ることができます。何事も真剣に取り組むことの重要性を余暇の時間にも学ばせていただいています。その甲斐あってか、昨年度は研究室始まって以来の優勝をもぎ取りました。今年も磐石の戦力補強を済ませ、最近元気のない赤い鯉を盛り上げるくらいの気概で鼻息荒く優勝を狙っています。

長々とお付き合いありがとうございました。研究テーマの詳細など本文中に書ききれなかった部分も多くありますので、研究室に少しでも興味をもたれた方



写真3．昨年のハンマー祭での集合写真

は表層環境地球化学研究室のホームページをご覧ください(<http://www.geol.sci.hiroshima-u.ac.jp/~environ/>)。また近くにお寄りの際は、お気軽に遊びに来てください（写真4）。

追伸ですが、来年は日本地球化学若手会が広島で開催されます。地球化学をこよなく愛する若手のみなさん！是非こぞってご参加ください。広島で美味しいお好み焼きでもほおばりながら将来の地球化学・環境化学について語り合いましょう！ それでは、失礼いたします。光延でした。



写真4．清水先生の還暦パーティでの研究室メンバー集合写真（最前列左から3番目が清水洋教授，最前列左から4番目が高橋嘉夫助教授，最後列左から4番目が筆者）



女性研究者に聞く No.4

Department of Geology and Geophysics,
University of Wisconsin-Madison
Associate Scientist,
Director of Ion Microprobe Laboratory

木多紀子

「研究分野は？」

同位体宇宙地球化学。隕石試料の同位体分析や年代測定から太陽系初期形成過程への制約を与えることを目指しています。同時に、測定に使用している二次イオン質量分析計（SIMS）を用いた高精度同位体分析法を広範囲な研究分野に応用することにも関心があり、地球化学に限らず、環境科学や医学生物関係にも応用分野を広げたいと思っています。

「家族は？」

日系3世米国人の夫と小学生の娘1人。2年前にウィスコンシンへ移動してからは、夫はパートタイムで働き、娘の世話と家事を引き受けています。アメリカではいろいろな家族の形態が存在するので我が家のような夫婦の役割が逆転しているケースは珍しくなく、本人も周りも特に意識することはありません。

「アカデミックな道に進もうと思ったきっかけは？」

高校生の頃、星を見るのが好きだったので、天文学者になりたいと思いました。大学では地球物理学へ進み、惑星形成理論を志望しましたが、理論を専攻するには物理の出来が悪く、結局質量分析計を使って隕石の年代測定をするという分析の分野へ進みました。

「博士に進むときの家族の反応は？」

母はこれですます結婚できなくなると大変心配しましたが、若い頃天文学に興味のあった明治生まれの祖母が、やりたいだけがんばりなさいと励ましてくれました。大学院最後の年に参加したオーストラリアの国際会議に、母は海外旅行をかねて私の発表を見に来てくれました。研究者として独り立ちしつつある姿をみて、嫁にも行けず就職もできなかったらと心配するのをやめたようです。

「研究の中で印象に残るできごとは？」

地質調査所時代（現産総研）に新しいSIMSが入って、最初の数年間はトライエンドエラーの続出でした。最後にコンドリュールのAl-Mg年代測定が成功して、太陽系の誕生からコンドリュール形成まで200万年程度の年代差を見つけ、その年代差が若い星の天体観測から推定される原始惑星系円盤の寿命にほぼ一致することを知り、やっと惑星形成理論と隕石年代研究の接点が見えてきたと思った瞬間が最も印象に残っています。ちょうどこの頃、産総研では1年間管理部門への出向に出され、いい経験ではありましたが研究現場から離れていることがたいへんな苦痛でした。出向から戻った後は毎日が楽しくて異常に研究アクティビティーが高くなり、理論天体物理の研究者とコンドリュール形成過程のモデルを共同研究する機会を得ました。この経験を通して、天然試料の分析でしか得られない情報があり、適切な情報を私たちが引き出すことが重要であることを学びました。

「女性ゆえに損（あるいは得）をしていると感じることがありますか？」

女性が少数派なので良くも悪くも目立つのは確かですが、個人的には多くの女性の先輩や理解のある指導者に恵まれたこともあり、得をしている方が多いようです。しばしば自分の能力を超えた役割を与えられることもあり悩みますが、研究者のキャリアにとっては成長するチャンスでもあり良い影響があります。

出産の前後に半年間休み、その後子育て期間中は出産前から積み残した仕事を片付けるのに5年近く追われていました。その間に、優先順位の高い仕事を選ぶように心がけるようになり、何が一番大切かを考える訓練になりました。

日本にいたときも、女性だからという理由で嫌な思いをしたことはありませんが、米国では自分自身が伸び伸びしているように感じます。多分、日本よりも人間関係が単純な上、複数民族のアメリカではみんな違っているので、特に少数派であると感じることがないのでしょうか？

「後輩に一言（女性研究者へのすすめ）」

大学院とポスドクの間は固体質量分析計（TIMS）を使った年代測定をして、化学分離の腕も良くなったと思った頃に、地調に就職しそれまで経験のないSIMSを担当することになってしばらく苦労しまし

た。しかし今から振り返ると、隕石の同位体研究は本格的な SIMS 時代に突入するところで、早くから始めることができ大変幸運でした。その隕石研究でいい成果が出ているところで、今度は夫の希望により彼の母国である米国へ移住しましたが、これも大きな転機となりました。イオンプローブ実験室のディレクターとして赴任したウィスコンシン大では、最新型の SIMS (IMS 1280) が入り、これまでできなかったような高精度の分析値がどんどん出せるようになってきました。向こう見ずなところがあって苦勞もするのですが、「新しいことを始める」、「変化を受け入れる」のを恐れないことが、自分の想いを越えたところで結果を与えてくれるように思います。



書評

『陸域生態系の科学「地球環境と生態系」』

編集：武田博清・占部城太郎

出版：共立出版 2006年5月発行 定価：4,000円

ISBN 4-320-05637-X

近年、地球温暖化などの地球規模の環境変化が顕在化しつつあるなかで、環境変化の緩衝剤としての生態系の役割が注目されている。今後の地球環境の予測や地球温暖化に対する対策のためには、環境変化に対する生態系の応答や全球的な物質循環における生態系の役割の理解は必要不可欠であり、科学の様々な分野の中でも近年最も注目されている研究課題のひとつと言える。

そういった中で本書は、「陸域生態系の地球環境変化に対する応答の研究」というプロジェクト研究の成果を踏まえて展開されたものであり、地球温暖化など

環境問題と陸域の生態系の相互関係、陸域生態系科学の現状についてこの分野を代表する20人余りの研究者によって紹介されている。

本書は、全6章から構成されているが、環境変動に対する植物の生理的な特性の変化といったミクロの視点から、植物群落の応答、森林生態系内の物質循環、さらには森林生態系を中心とした周辺の大気や水域との相互関係といったマクロの視点までが順に記載されており、陸域生態系科学を概観できる。内容は生理学から物質循環まで幅広くカバーされており、領域横断的な視点を養う際にも有用であるという印象を受けた。それぞれの内容は執筆者の最新の研究成果も含めて、陸域生態系の基本コンセプトについて生物学や地球科学の基礎的な部分から記述してあるため専門分野以外の人でも比較的に入り込みやすい。実際に、自分は海洋生態系での物質循環を専門としており必ずしもこの分野に明るいわけではないが、全体を通して違和感なく読むことができた。また、方法論や測定技術の記載も豊富であり、異なる専門分野においても参考にできる部分が多く含まれている。各章の構成に関しては、各章の始めに用意された「この章のポイント」によって章ごとの目的が明らかにされており、また、各章の終わりにはまとめの代わりとして「Exercise」が用意されており理解度を確認できるようにしているといった点で非常に親切的な作りとなっている。

編者の序文にもあるように、やや難しい内容も含まれているとは思いますが、陸域生態系や環境科学に興味のある生物系・地球科学系の学生が分野の全体を見る入門書としては十分な内容と言えるのではないかと。また、この分野内の専門家や自分のような類似の分野の人間にとっても視点を変えたり視野を広げたりといった形で利用できるだろう。

(静岡大学大学院理工学研究科環境科学専攻・
名取雄太)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人事公募，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2007年3月はじめを予定しています。ニュース原稿は1月中旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

山本鋼志

〒464-8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科
（理学部気付）

Tel/Fax : 052-789-2522

E-mail: news-info@geochem.jp

南 雅代

〒464-8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学年代測定総合研究センター

Tel : 052-789-3091

E-mail: new-info@geochem.jp

日本地球惑星科学 連合ニュース

No. 03

(2006 年 7 月)

- [1] 日本地球惑星科学連合発足 1 年
- [2] 2006 年連合大会を終えて
- [3] 2007 年連合大会のお知らせ
- [4] 日本地球惑星科学連合 運営会議議事録
- [5] 日本地球惑星科学連合 拡大評議会議事録
- [6] 日本学術会議だより

日本地球惑星科学連合は、2006 年 5 月で設立 1 周年を迎えました。本号では、はじめに、日本地球惑星科学連合発足 1 年に関連した記事を掲載します。次に、2006 年連合大会の報告と来年の連合大会の予定をお知らせします。引き続き、第 2 回運営会議議事録と第 3 回評議会議事録を掲載します。また、2005 年 10 月から新体制で再出発した日本学術会議の活動の概要と地球惑星科学委員会の活動内容について報告致します。

[1] 日本地球惑星科学連合発足 1 年

●日本地球惑星科学連合設立 1 周年を迎えて

日本地球惑星科学連合 代表・運営会議議長
浜野 洋三 (東京大学 教授)

日本地球惑星科学連合(Japan Geoscience Union)は本年(2006 年)5 月に設立 1 周年を迎えました。この 1 年間に連合への加盟学協会は設立時の 24 学会から 43 学会(会員数合計約 50,000 人)に倍増し、加盟学協会のカバーする学問領域も、地球惑星科学の枠組みをその周辺の分野に拡大しつつあります。連合としての最初の年大会は本年 5 月 14 日-18 日の期間、幕張メッセ国際会議場で開催され、4000 名の参加者、2700 件の講演があるなど、これまでで最大規模の大会となりました。本連合は、地球惑星科学に係わる広範な学問分野を網羅する総合的な連合組織として、地球惑星科学コミュニティの相互理解、意見集約や合意形成を図ると同時に、対外的な窓口組織として、国や一般社会に対して、提言や情報発信を行なっていくことを任務としています。地球惑星科学に係わる学界の再編は、アメリカ地球物理学連合(AGU)の 5 万人規模の学会への拡大、EGS(地質学分野)と EUG(地球物理学分野)の合体による欧州地球科学連合(EGU: European Geosciences Union)の発足、一昨年のアジア

オセアニア地球科学会(AOGS)の発足等、世界的にもこの数年で大きく進んでいます。このような地球科学界の再編の中で、本連合は地球惑星科学に係わる連合体として、国際的にも連携して地球惑星科学の分野の世界的な発展に貢献すると共に、環境問題、災害問題などの人類社会からの要請にも応えていく役割を果たすことをめざしています。このような国際連携や国や一般社会への提言や情報発信を行なっていく上では、2005 年 10 月に新しい体制で発足した日本学術会議との連携は必須であると考えています。この程、本連合は地球惑星科学に係わる連合体として、日本学術会議の協力学術研究団体として認定され、今後の連携のための体制が整いました。

この 1 年間の連合の活動は、対内的には連合大会の開催、科学情報誌 JGL(Japan Geoscience Letters)の発行等、により地球惑星科学コミュニティの相互理解や意見集約に貢献し、対外的には、初等・中等教育における地学教育や理科教育問題への提言、報道機関を通じた研究成果等の情報発信、一般市民、学生を対象とした教育・啓蒙・アウトリーチ活動等、を行なってきました。連合が今後このような機能を果たしていくために、皆様の連合へのより一層の積極的な関与をお願いします。

最後に、廣田勇前評議会議長には、連合立ち上げの 1 年間、的確なご助言・ご対応をいただきました。ここにお礼申し上げます。また、本蔵義守新評議会議長には、これから 1 年間よろしく願いいたします。

●日本地球惑星科学連合の現状と将来の姿

日本地球惑星科学連合 評議会議長

本蔵 義守 (地球電磁気・地球惑星圏学会 会長)

わが国における地球惑星科学関連の学界は、小規模な学会が非常に多く、それぞれが個性ある存在感をアピールしていたように思う。そのこと自体に問題があるわけではないが、地球惑星科学全体としてのまとまりに欠けることから対外的なアピール力が弱く、少なくとも対外的窓口くらいは必要ではないかと 15 年ほど前から考えていた。連合の発足により、この問題点はあっという間に解消されたが、まさか 43 学会(6 月 1 日現在)が参加し、5 万人の規模になるとは私には想像すらできなかった。従来の合同大会を発展的に引き継いだ連合大会は、参加者 4,000 名、発表件数 2,700 の規模となり、順調に発展しつつあると感じている。そろそろ、連合大会で発表された研究成果を世界に向け自らの手で(つまり連合誌により)発信することも考えてはどうだろうか。

今回、評議会議長に選出されたのを機会に、連合の更なる発展に“何が必要とされるだろうか”を考えてみたい。参加学会の会長からなる評議会は、これほどの規模になるとその機能に多くは期待できないだろう。現実には運営会議とその下の常置委員会こそが連合の母体であり、これらの強化がまず必要ではあるまいか。連合の顔とも云うべき真の代表は現在の運営会議議長であるが、外からは見

えにくくはないだろうか。個人的には、連合会長という名称の方が相応しいのではないかと考えている。また、参加学会と運営会議の関係ももう少し整理が必要ではないだろうか。現在の運営は、個人登録者を主体とする連合大会への参加費が大きな財源となっていると理解しているが、連合大会の運営だけならばこれでもよいが、今後さらなる活動が期待される連合の運営として果たしてこれでよいのだろうか。任期1年の評議会議長がいきなり何を言うかとおしかりを受けそうであるが、あえて感想を述べてみた。

●日本地球惑星科学連合発展への期待

日本地球惑星科学連合 前評議会議長
廣田 勇 (日本気象学会 理事長)

昨年5月に発足した地球惑星科学連合はこの春の合同大会で二年目を迎えた。設立時の参加学会数は24であったが、その後、関連する多くの学協会が連合の趣旨に賛同し、現在はその数が二倍近い43に達したのはまことに喜ばしい。

思い起こせば、(故)坪井忠二先生の時代からの念願であった「我が国の地球科学を一体化すること」の理念を受け継ぎ、河野長氏の呼びかけに応じて、地球物理学分野を中心に関係有志が集まってほぼ10年近く議論を重ねてきた結果が現在の連合活動に繋がったと言える。その間、地球惑星科学各分野の研究内容・学問体系自体が日進月歩の発展を見せ、連合傘下の各学協会所属の会員数も急速に増加しつつあるのは、合同大会の盛況ぶりをみればよくわかる。当然、このような雰囲気の中から優れた次世代研究者群の育つことが強く期待される。

今後の活動の方向としては、連合出発時の理念に掲げた「関連各分野の結合によって地球惑星科学を一層発展させること」、それを基盤として「まとまった一つの学問分野として、物理学・化学・生命科学等の大きな分野と対等に、文化国家としての学問のあるべき姿を実現してゆくための要望・提言を外部的に発信してゆくこと」を初心に帰って邁進して貰いたいものである。対外活動の一環として、昨年秋には、地球惑星科学関連の日本学術会議会員の方々にも連合評議会メンバーとして正式に加わっていただくべく規約の改正を行なったので、今後、連合と学術会議とを結ぶチャンネルが強化されるものと信じている。

幸いにして次期評議会議長には連合発足以前からの経緯を良くご存知である本蔵義守氏にご就任いただいた。最後に、一年間の世話役を終えるに当たって、連合設立準備段階から種々ご尽力下さった運営会議の浜野洋三氏と完璧な事務を遂行して下さい下さった事務局の皆様にお礼を申し上げる次第である。

[2] 2006 年連合大会を終えて

1. 総括

2006 年運営会議・大会運営委員会 委員長 津田敏隆
日本地球惑星科学連合の2006年大会が5月14日から5日間に

わたり、幕張メッセの国際会議場で開催され、成功裏に終了しました。大会運営委員会を代表して、参加者ならびに関係者のご協力に深く感謝致します。有難うございました。

日本地球惑星科学連合が発足した昨年5月時点では25学協会が参加していましたが、その後続々と加盟が増え、連合大会開催時には43学協会、延べ会員数4万9千人を抱える大きな組織に成長しました。これにともない、連合大会の参加者も昨年度の合同大会に比べて約600名増え3,996名でした。

プログラム編成を担当するプログラム委員会(北和之委員長)は、15の学協会から推薦された精鋭30名で構成されました。学協会ならびに、一般からの提案などを基礎に、レギュラー(61)、スペシャル(40)、ユニオン(4)、一般公開プログラム(4)の計109セッションを定めました。セッション数は前年度(110)と同程度ですが、講演申し込み数は2,725件と、前年度(2,336件)から約16%増え、日本地球惑星科学連合の研究教育活動が活性化していることを反映しています。

しかし、プログラム編成にあたり、口頭発表枠に既に余裕がなかったためポスター発表を増やしました。最終的に口頭・ポスター発表数はそれぞれ1,416件と1,309件となりました。昨年度は両者の比が4対3(それぞれ1,332件と1,004件)だったのがほぼ1対1になっています。これを受けて、運営事務局はポスター発表を重視すべく、ポスター会場の広さを倍増するとともにポスターボード列の間隔等も広げ、ゆったりと発表・議論ができるように配慮しました。

ところで、連合大会が巨大化するにつれ、参加者の生の声が聞こえにくくなる恐れがあります。現状の把握と反省、さらに今後の大会運営の参考にすべく講演者にアンケート調査を行いました。まず、ポスター発表者の満足度が気懸かりでしたが、ポスター会場が狭いと感じた発表者は少数で、ポスター発表の全体的評価を約9割が「満足」と回答しており、関係者は一安心しています。

連合大会は拡大を続けており、次年度にはさらに投稿数の増加が期待されますが、既に口頭講演・ポスター会場とも飽和状態です。そのため発表時間拡張の手段として、5時以降の口頭発表(night session)、あるいは会期を現行の5日から6日間に拡大することの是非についても意見聴取しました。night session は様々な理由から約8割が否定的でした。逆に、会期拡大は「やむをえない」を含めて約8割が受け入れる傾向です。しかし、全期間は参加しにくくなるため、関連分野のセッションが分散しないようなプログラム編成が要請されるなど、今後検討すべき課題が残されています。

これらの意見を十分検討した上で、次回の連合大会を円滑に運営すべく努力致しますので、なお一層のご支援を賜りたく存じます。最後に、大会運営の裏方で献身的な努力を尽くされた事務局関係者の方々、アルバイト学生諸君に深く感謝します。

今後とも、より多くの皆様に、引き続き積極的なご参加をお願いし、お礼の挨拶と代えさせていただきます。

[大会概要]

会期：2006年5月14日(日)~18日(木)

会場：千葉幕張メッセ 国際会議場

● 加盟学協会数 43 学会

● 協賛学会数 4 学会

● 後援団体 48 団体

● 参加者数 3,996 名

事前参加登録者数 2,362 名

(一般 1,472 名, 学生 574 名, 一日券 316 名)

当日参加登録者数 1,634 名

(一般 325 名, 学生 200 名, 一日券 782 名)

見学学部生 263 名, シニア(70 歳以上)64 名

● 論文投稿数 2725 件

● セッション数 109 件(ユニオン:4, レギュラー:61, スペシャル:
40, 一般公開プログラム:4)

● 会場数 12

● アルバイト延べ 147 名 地元ボランティア 延べ 29 名

● 団体展示 30 団体(32 ブース)

COE: 京都大学 COE: 東京大学 COE: 名古屋大学

COE: 東京工業大学 COE: 東北大学

(株)アイ・エイチ・アイ・エアロスペース

エースポイントシステムズ(株)

愛媛大学地球深部ダイナミクス研究センター 愛媛大学地球科学系

応用地質(株)/応用地震計測(株)

オックスフォード・インストゥルメンツ(株)

(独)海洋研究開発機構 地球内部変動研究センター

(株)勝島製作所

(株)建設技術研究所

高知大学海洋コア総合研究センター/(独)海洋研究開発機構高知コ
ア研究所

国土交通省 国土地理院

自然科学研究機構 国立天文台 ALMAプロジェクト

(独)産業技術総合研究所 地質調査総合センター

ジュー・データシステムズ(株)

(独)情報通信研究機構 電磁波計測部門

石油資源開発(株) 技術研究所

総合研究大学院大学複合科学研究科極域科学専攻/情報・システム
研究機構国立極地研究所

(株)地球科学総合研究所

千葉大学大学院自然科学研究科 地球生命圏科学専攻大学院 GP

「地球診断学創成プログラム」Integrated Ocean Drilling Program

東京大学 海洋研究所

日本ニューメリカルアルゴリズムズグループ(株)

白山工業(株)

パシコ貿易(株)

財団法人 リモート・センシング技術センター

ワイエスアイ・ナノテック(株)

Integrated Ocean Drilling Program

● 書籍・出版団体展示 18 団体(17 ブース)

朝倉書店

インフォトレーダー(株)

(有)海猫屋

エルゼビア・ジャパン(株)

海洋出版(株)

(独)科学技術振興機構

共立出版(株)

京都大学学術出版会

ケンブリッジ・ユニバーシティ・プレス・ジャパン(株)

(株)古今書院

シュプリンガー

(株)テラハウス

テラパブ

(財)東京大学出版会

日本地質学会

(株)ニホン・ミツク

ユナイテッド・パブリッシャーズ(株)

ワイリー・ジャパン

● 大学インフォメーションボード展示 8 団体(8 ブース)

筑波大学 大学院生命環境科学研究科

金沢大学 理学部地球学科

立正大学大学院 地球環境科学研究科

静岡大学 アクロス研究グループ

神戸大学理学部地球惑星科学科

岡山理科大学

高知工科大学

琉球大学 理学部物質地球科学科

● 会合 63 会合

● 取材プレス数 36 社

[3] 2007 年連合大会のお知らせ

1. 概要

● 会期: 2007 年 5 月 19 日(土)~24 日(木)

● 会場: 幕張メッセ 国際会議場

● 費用: 投稿料, 参加費

基本的に 2006 年大会に準ずる.

詳細別途公開 (但し見学学部生, 70 歳以上無料)

● 各種登録開始・締切日(予定)

講演投稿 開始: 2007 年 1 月 10 日(水)

締切: 2007 年 2 月 14 日(水)頃

事前参加登録 開始: 2007 年 1 月 10 日(水)

締切: 2007 年 4 月 13 日(金)頃

2. 「セッション提案」のお知らせ

2007 年大会プログラム委員長 古村孝志

2007 年大会プログラム委員長を務めることになりました東京大学
地震研究所の古村孝志と申します. これまでの合同大会と連合大会
の大会運営に携わってきた方々の様々な経験の蓄積を引き継ぎ,

セッション構成とプログラム編成を進めたいと考えております。北和之 2006 年プログラム委員長をはじめ、プログラム局員、大会スタッフの皆様によるご指導をいただき議論を重ねながら、より充実したプログラムを目指していきたいと考えております。より活発で充実した大会となりますよう、皆様からの新しいご提案を歓迎いたします。

【1】プログラム委員会の構成と役割

プログラム委員会についてご説明致します。

- (1) プログラム委員会は、連合加盟学会選出のプログラム委員と連合大会運営委員会プログラム局員から構成されます。
- (2) プログラム委員会は、提案されたセッションの採択、プログラム日程案の作成を行います(具体的なスケジュールは後述)。
- (3) プログラム委員会は、(2)の作業を行います。最終的な全体調整はプログラム局幹事会(後述)が中立的な立場から責任を持って行います。

プログラム局幹事会は、2006 年プログラム委員長、前年度・次年度のプログラム委員長に、分野のバランスを考えた数名の幹事を加えて構成します。プログラム編成に関する検討事項はプログラム局幹事会で案を立て、プログラム委員会で検討致します。

連合大会運営委員会プログラム局員と学会選出プログラム委員は兼任可能ですが、プログラム局幹事会では中立的な立場を保つため、学会選出プログラム委員との兼任はできません。

【2】2007年大会のセッション区分(案)

2007 年大会でもこれまでの大会と同様に、レギュラーセッション、スペシャルセッション、ユニオンセッションの3区分を設けて、プログラム編成を行います。その他にも、前回同様に、一般の方々や教育関係者も対象とする一般公開プログラムセッションや海外の研究者による発表を多数招き英語で行う国際セッションなどのご提案もお待ちしております。

[レギュラーセッション]

各学会で固有の定番のテーマを扱い、少なくとも5年程度セッション名を固定して継続開催するのがレギュラーセッションです。各学会から提案していただいたセッションの他に、レギュラー化を希望され、過去の実績からレギュラー化が適当であるとプログラム委員会が判断したセッションがあります。2002年に提案されたレギュラーセッションについては、5年が経過しましたので見直しを行うことになっております。学問の進展等により、レギュラーセッションの統廃合あるいは新設を行い、更なる活性化に結びつけたいというご提案がありましたら、プログラム委員会で積極的に検討させていただきます。また、新規参加の学会に対しても、レギュラーセッションをご提案頂く、もしくは、以下のスペシャルセッションとして3年程度実績を重ねた上でレギュラー化を検討するなどの対応を考えております。

[スペシャルセッション]

旬の研究テーマを学会横断的に議論するセッションとして、これま

で同様に一般から公募します。

[ユニオンセッション]

全学会に関係する話題を取り上げるセッションです。大会運営委員会提案や公募などによって、2002 年は3セッション、2003 年は1セッション、2004 年と2005 年は2セッションを1日ずつ、2006 年は4セッションが実施されました。2007 年大会も同様な方針を考えておりますので、皆さまからの積極的なご提案をお待ちしております。

【3】2007 年大会プログラム編成スケジュール(案)

2007 年大会のプログラム編成日程案を以下に示します。

7月下旬	プログラム委員会再編開始
9月初旬	レギュラーセッション決定(レギュラー化を希望されたセッションの検討を含む)
9月中旬～	ユニオン、スペシャルセッション公募開始
10月下旬	ユニオンセッション決定
11月初旬	スペシャルセッション公募締切
11月中旬	スペシャルセッション採択
1月10日ごろ	投稿受付開始
2月初旬	早期締切
2月14日ごろ	投稿締切
2月中旬	セッション日程等の編成
3月中旬	プログラム最終調整と編成終了
3月中旬	投稿者へ日程時間割通知
5月19～24日	2007 年大会

上記のセッション区分案、プログラム編成スケジュール案などはプログラム委員会で検討し、決定する予定です。結果につきましては、プログラム委員および連合大会のウェブサイトを通して、皆様にお知らせいたします。2007 年の大会に向けて、どうぞよろしくお願い致します。

【4】日本地球惑星科学連合 運営会議議事録

1. 日本地球惑星科学連合 第2回運営会議議事録

日時:2006 年6月16日(金)15時～18時

場所:東京大学理学部1号館(西棟)7階710号室

出席者:25名

浜野洋三(議長)、木村学(副議長)、中村正人(総務委員長)、吉田武義(総務副委員長)、川幡穂高(財務委員長)、小原隆博(財務副委員長)、吉田真吾(企画副委員長)、田近英一(広報・アウトリーチ委員長)、原辰彦(広報・アウトリーチ副委員長)、津田敏隆(大会運営委員長)、高橋幸弘(大会運営副委員長)、古村孝志(プログラム局委員長)、北和之(プログラム局副委員長)、渡辺真人(プログラム局副委員長)、中川茂樹(情報局長)、武井康子(情報局副委員長)、根本泰雄(教育問題検討委員会副委員長)、瀧上豊(教育課程小委員会副委員長)、中井睦美(教員養成等検討小委員会世話人)、加藤照之

(国際委員会副委員長)、岩上直幹(事務局長)、谷上美穂子、武重朋子、山口あけみ、吉田文枝(以上事務局)

議題:

1. 2006 年大会報告

2007 年大会について

- ・会期及び会場について(アンケート結果)
- ・新規加盟学会への参加呼びかけについて
- ・その他
- 2. 各委員会から
- ・財務委員会
- ・プログラム委員会(著作権・投稿規定・委員選出他)
- ・情報局(個人情報の最適化)
- ・広報・アウトリーチ委員会(JGL 編集委員会新設他)
- ・総務委員会(男女共同参画小委員会新設他)
- ・教育問題検討委員会 教員養成等検討小委員会新設
- ・教育問題検討委員会 (提言提出に関して・委員会旅費・地理系委員会他)
- 3. 学術会議との連携について
- 4. EGU/AOGS との連携

配布資料:

1. 1-1) 参加人数集計報告
- 1-2) 個人情報登録状況
- 1-3) 2006 年予算と実績
- 1-4) 2006 年大会セッション開催状況
(会場係アンケートより)
- 1-5) 岩上メモ
- 1-6) プレス来場者リスト
- 1-7) 年間スケジュール
2. 2-1) 2006 年大会アンケート調査のまとめ
3. 3-1) 広報アウトリーチ委員会活動報告
4. 4-1) 連合—学術会議懇談会議事次第
- 4-2) 分野別委員会の組織と活動ファイル
6. 6-1) 日本地球惑星科学連合運営会議名簿

議事次第:

1. 2006 大会報告および 2007 年大会について

- ・参加者は年々増加しており、今年は約 4 千名の参加登録があった。一般公開参加者数約 250 名、無料参加者数(学部生、高校生、シニア等)約 500 名、有料参加者数 3,500 名である。(資料 1-1)参照)
- ・オーラル発表の会場は、慢性的に不足している。今年は、オーシャン B をオーラル発表会場に設定したので、昨年より 1 部屋増加した。ポスター発表会場は、ポスター間及び中央空間が増えたためか大変好評であった。

高校生発表も成功した。参加高校が多かったので来年はもっと広い会場に移してはどうか?

・今大会は、ポスター:口頭=1:1 としポスター発表を昨年より増やした。しかし、会場は現在すでに飽和状態なので、来年以降の大会日程等検討の為、発表者にアンケート調査を実施した。(回収率 40%)調査結果は配布資料 2-1)のとおりであるが、気付いた点を挙げると、「セッション会場が狭い。」「関連セッションが初日と最終日開催は止めて欲しい。」「口頭からポスターへの変更は可能である。」「コアタイムが遅く長い。」等のコメントがあった。「ポスター会場が狭い」と感じた人は 14%なのでポスター会場レイアウトは成功である。口頭からポスターへ変更した人 38 名のうち不満を感じた人は 5 名であるが、この理由が講演スタイルの変更であったかは定かではない。また、Night Session は否定的意見が多かった。6 日間の会期拡大については、76-79%が受け入れられるという結果となった。公開セッションは土日開催が良いという意見もあった。

現在の縦長ポスターボードは使い難く、横長ボードを希望する声があったが、一人当たりの使用面積が広くなるので、実行は難しい。

・口頭発表一件当たりの経費は、6,000 円、ポスター発表一件当たりの経費は、5,000-6,000 円である。そのため、口頭からポスターに移動しても経費は減っていない。

横長ポスターボードを使用するとコストが高くなるので、財政が安定するまでは待ってほしい。

大会参加費が高いという声もあるが、連合は現在大会収入だけで運営しているので参加費を下げるのは困難である。

・セッション入力および投稿システムは安定していた。

プログラム編成に関しては、幕張メッセは 70 人部屋が多いが、100 人規模のセッションが多いのでセッションによって多少不公平があった。コンピーナーから 100 人部屋を希望されたセッションのうち、02~05 年の 3 年間の聴講者が 80 名を越えたセッションのみに、100 人部屋を割り当てた。他に発表者が多く 4 コマを超えるセッションは、70 人部屋は無理であり、100 名以上の部屋とした。

最終日のポスターセッション開催をできるだけ回避した。そのため口頭発表とポスター発表が 2 日ずれるものがあった。ほとんどが地震学会のセッションであった。地震関係の参加者は全日程参加すると推定し、このように設定したが、特にクレームはなかった。また、同一日にポスター発表が重なった発表者が 24 名いたが、本人に希望をとりポスターを横に並べて掲示するなどの対応をとった。講演時間は基本的には 15 分だが、セッションの中には最短 8 分というものがあった。このようなことを避けるためにもガイドラインを作るべきではないか?

評議会で新規加入学会から連合大会参加を検討する意思表示があったが、大気化学研究会が、連合 2007 年大会に参加することを決定した。

今回 5 年に 1 度のセッション見直しを行ったが、プログラムが終了したセッションを除くとほとんどが継続した。

レギュラーセッションを出している学会は、プログラム委員を選出するというのが、大会中に開催したプログラム委員会で決定した。

外国人コンピーナーに対しては、メールによるアナウンスがすべて日本語しかないで、日本人がフォローしなければいけないが、今回は充分ではなかった。今後は日本人パートナーにも適切なアクションをとるようフォローし、適切なパートナーがいけない場合は連合で探す仕組みを作り、外国人コンピーナーがスムーズに作業できるよう努める。

【アクションアイテム】

1) 大会論文投稿規定、著作権規定、ガイドラインを決める。

2) セッション番号の英字は使い切ったので、新たに 2 ケタで付け直しが必要である。

3) 海外在住日本人のセッション提案があったが、二転三転の後セッションを取り下げた。これについては、原因を突き止める。

・地理関係のセッションが少ないが、学会が連合大会の前後に開催されることが原因であると思われる。地理関係の学会に対しては、大会期間を長くして、受け皿を作った上で連合大会と一緒に行うよう誘うことが必要である。但し、地理学会参加費は 2,000 円なので、果たして当日参加 15,000 円で来てもらえるかが懸念される。

加盟学会には、スペシャルセッションを一つは出してもらうよう依頼する。

・日本地球惑星科学連合 2007 年大会 会期決定

2007 年 5 月 19 日(土)～24 日(木) 6 日間

Night Session 実施の案も出されたが、まず受け皿を充分用意して新規学会に呼びかけたいということもあり、会期を一日増やし 2007 年は 6 日間の日程とした。但し、初日または最終日は、セッション数を少なくし最少数で会場を借用する場合もある。大会会期を 6 日間に設定することにより、ポスター数を 400 近くまで増やすことが可能となる。

「高校生セッション」開催日には一般のセッションも行ってほしいが、高校生にとっては有意義であることを考慮する。

2. 各委員会から

〈財務委員会(委員長)川幡〉

・大会当日費用は、参加者が伸びたにも関わらず約 100 万円減っている。要因としては 2 つあり、アルバイトの会場係を各会場一人にすることと、使わない会場を返却するという努力の結果である。来年もこのままやっていきたい。JGL 作成費、ポスター会場を広くしたことによる会場費増加等で経費が増えたので、今大会で参加費を値上げした。

・連合の収入はほとんど大会収入のみで、すべての経費を賄っていることから、常に 2 千万円は保持していきたい。また、単年度では必ずプラスになるよう努力する。

現在のところ最終的には、360 万円の黒字が予想される。使いみちとしては、以下の 4 点が挙げられる。

① ホームページの英語システム・・・利用者が少なく、開発費が高いためで保留だが、AOGS/EGU との連携もあるので今後考えていく。

② 事務局経費・手当

③ JGL 編集・作業費用

④ 委員会経費・・・漏れているものがないよう、委員会毎に集計する。

・2008 年以降は大学 COE からの収入がなくなるので、総会会場費を現在は実費のみ請求しているが、値上げし利益を得てはどうか？

(プログラム局(委員長)北)

・大会投稿規定は、プログラム委員で検討、原案を作成し、大会運営委員会で承認手続きをとる。

・今後の日程としては、7 月にプログラム委員募集を開始する。全学会にプログラム委員を選出してもらう。

・各学会に会期を 6 日間に確定したことをアナウンスし、セッション数を増やすことに協力依頼をする。具体的には、学会に対してセッションを出すよう要請し、1 カ月後には返事をもらうようにする。

・各学会の総会をセッション日程確定前に決めたいという希望があった。

(情報局(副委員長)武井)

・1 年間に渡りメール送信しても宛先不明で戻ってくる人が 1 割いるが、もう少し調査を行った上で、対象者を削除するかどうかを検討したい。

(広報・アウトリーチ委員会(副委員長)原)

・「高校生セッション」は狭い会場だが活気があり、高校生の反応は概ね良好であった。

「高校生セッション」参加者に記入してもらったアンケートの結果を基にコアタイム再検討など今後改善していくことが必要である。

・アウトリーチ活動としては、委員会のメンバーに諮って飛騨アカデミーに講師派遣の協力をしている。

・HP のアウトリーチページ作成と出前授業は、今後の課題である。

(広報・アウトリーチ委員会(委員長)田近)

・広報・アウトリーチ委員会の下に「JGL 編集委員会」を設立した。

・JGL 作成・発送費用の半分は広告収入で補っている。しかし、JGL の広告収入は今後減っていくことが考えられる。大会参加者を増やし、関係するところへの配布を徹底していき、無料配布で発行部数を増やしたい。JGL を学術刊行物として認定請求中である。認定されると、郵便料金がかかなり安くなるので、発送費節約につながる。

・年 2 回発行の連合ニュースは、ホームページに掲載し情報発信していく。

(総務委員会(委員長)中村)

・総務委員会の下に男女共同参画委員会が置かれることが評議会で承認された。委員長は前田氏、副委員長は富樫氏、中村氏である。本来は学会ごとに委員を選出してもらうべきであるが、当面は個人的参加資格でやっていく。男女共同参画学協会連絡会に正式参加の申込をしている。会費は年間2万円で、何年かに一度世話人役が回ってくる。また、どういったことが男女不平等として現れているかをアンケート調査し今後の活動に生かしていく。

(教員養成等検討小委員会(委員長)中井)

・教育問題検討委員会の下に「教員養成等検討小委員会」が正式に立ち上がった。

主な活動としては、従来と大きく変わった教員養成システムを連合メンバーに普及していくことと、提言を出すことによって、小中学校教員の養成システムの改善を図る。

今の教員養成システムは、文科省推進によりほとんど「教育学」にシフトしており、特に小学校は科目をほとんど取らなくてよかった。小学校では、特に理科が弱い教員が増えており、地学の教育を受けていない教員が多いのが現状である。理学部の学生は教員免許が取りにくくなっている。教員に対する再教育も「教育学」重視である。

(教育問題検討委員会(副委員長)根本)

・第1回目の提言を、昨年文科省に提出したが、次は教育課程小委員会がまとめた次期指導要領改訂への提言を冊子添付で7月初旬に提出する予定である。提言内容の詰めは、浜野氏・田近氏・阿部氏・根本氏に任せることで合意を得た。文科省に提言を地球惑星科学連合から提出することは良いことである。

提言(義務教育段階における)は、地球科学の分野に関しては、

①「海」を充実させる。②地震も火山も共に学ぶ。③多様な自然災害を学ぶ。の3つにしぼる予定。

上記以外で提言に盛り込むことがあれば検討していく。

物理、化学、生物からは小中指導要領への提言はどこからも提出されていない。

30年前と比較して理科の授業時間数は大幅に(6割)減少している。小中学校で海について学ぶことはほとんどなく、地震・火山についても学ぶ時間が特に少ない。小中学校において理科の授業時間を増やすことは決まっているが、総合学習(年間150時間)を減らす時間を他教科で奪い合うことが予想される。

物理、化学、生物それぞれの基礎原理だけを学ぶのではなく、全体としての関わりを持って学ぶことが重要であるという意見が出された。但し、現場の先生との関わりもあり、実際にはなかなか動けないことも現実である。高校で地学系の先生がいないと生徒は地学系の大学に進むことが少ない。よって研究も衰退し、地学系の教員が減ってしまうという悪循環に陥る。現在の大学入試制度に問題があるのではないかという意見も出された。もっと工学系の人とコミュニ

ケーションがあって良いのではないか。

・地学教育学会へは連合から情報を渡すこととする。

・学術会議岡部氏より連絡があり、地理系の教育委員会を作るという話が出ている。これについては滝沢氏(地理学会)に聞いてみる。(担当 根本)

・教育問題検討委員会の2006年分旅費は、100万円程度を上限とし支払うこととする。来年以降は、メール会議で行う等の可能性も考えていく。

3. 学術会議との連携について

6月14日に学術会議地球惑星科学委員との意見交換会が開催されたので懇談内容を報告する。学術会議からの出席者は、5名(入倉氏・岡部氏・河野氏・平氏・永原氏)であった。

・地球惑星科学委員会の下におかれた3つの分科会(地球・惑星圏分科会、地球・人間圏分科会、国際対応分科会)には、連合からオブザーバーが参加し連携を取ることが望ましい。3つの分科会の下に小委員会があるが、予算的措置がなされない。そのかわりにメンバーは学術会議会員・連携会員でなくても良く、いくつも小委員会をつくることは自由である。

・学術会議の地惑関連の情報(議事録、会議日程等)を連合のホームページに掲載する。連合に会議日程を送ることは可能ということである。そのために連合の対応窓口を決めることが必要である。

・深尾国際委員長は連携会員なので、地球惑星科学委員国際対応分科会に入り担当となっていていただくよう依頼する。第二次連携会員にも協力していただく。

・今後は、総務委員会と永原先生とで連携を取り情報を収集する。

・来年3月以降にシンポジウム共同開催を企画しているので、企画委員会と総務委員会で検討する。このシンポジウムには、学術会議から100万円の資金提供がある。一般の人対象であるが、開催する以上、参加人数を確保しなければならない。学術会議への対応は、各学会ではなく連合であることを確認した。

4. EGU/AGU との連携

10月を目途に、EGU との連携の協定についての話を進めている。

(ジャーナル・共同セッション相互宣伝等)

EGU/AOGS の窓口として、国際委員会に事務局を設置した。事務局メンバーは、深尾氏、加藤氏、木村氏、佐竹氏、中村氏、吉田氏の以上6名である。今後、国際委員会としての対応はどのようにするか検討していく。

[5] 日本地球惑星科学連合 拡大評議会議事録

1. 日本地球惑星科学連合 第3回評議会議事録

日時:2006年5月18日(木)15:30-17:30

場所:幕張メッセ国際会議場2階201A会議室

出席者:(敬称略,日本を除く学会名50音順)

井上大榮(日本応用地質学会),今脇資郎(日本海洋学会),渡辺秀文,藤井敏嗣(日本火山学会),小畑正明(日本岩石鉱物鉱床学会),廣田勇(日本気象学会),藤野清志(日本鉱物学会),北里洋(日本古生物学会),浦辺徹郎(資源地質学会),島崎邦彦(日本地震学会),塩野清治(日本情報地質学会),池淵周一(水文・水資源学会),木部勢至朗(生態工学会),小林憲正(生命の起原および進化学会),前晋爾(日本雪氷学会),竹本修三(日本測地学会),近藤豊(大気化学研究会),松本良(日本堆積学会),奥村晃史(日本第四紀学会),下野洋(日本地学教育学会),松田准一(日本地球化学会),本蔵義守(地球電磁気・地球惑星圏学会),柏谷健二(日本地形学連合),木村学(日本地質学会,日本地球惑星科学連合),伊藤谷生(日本地質学会),前李英明(地理科学学会),大森博雄(日本地理学会),村山祐司(地理情報システム学会),田村俊和(東京地学協会),阿部隆(東北地理学会),鳥谷均(日本農業気象学会),小倉紀雄(日本陸水学会),永原裕子(日本惑星科学会,日本学術会議),入倉孝次郎,岡部篤行,平朝彦(日本学術会議),藤井良一(会計監査,前地球電磁気・地球惑星圏学会会長),浜野洋三,中村正人,吉田武義,川幡穂高,小原隆博,大村善治,田近英一,原辰彦,津田敏隆,高橋幸弘,北和之,阿部国広,根本泰雄,岩上直幹(日本地球惑星科学連合) 計 51 名

配布資料

1. 評議会名簿,運営会議委員会名簿
2. 新規加盟学協会申請書(日本農業気象学会,生命の起原および進化学会,生態工学会)
3. 第 2 回評議会議事録
4. 2006 年大会報告
5. 2006 年大会発表者へのアンケート集計
6. 広報アウトリーチ委員会 2005 年 5 月～2006 年 5 月活動報告
7. 企画委員会報告
8. 日本地球惑星科学連合男女共同参画委員会設立に関する提案
9. すべての児童・生徒が学ぶ地球人の科学リテラシー
10. 日本学術会議報告資料(1)(2)
11. 各委員会議事録集

議事

1. 新規加盟学協会の承認
◆日本農業気象学会,生命の起原および進化学会,生態工学会の 3 学会の加盟について連合評議会として正式に承認された。
2. 運営会議活動報告
1)大会運営委員会(津田委員長)
・2006 年大会の総括データとして,参加者数 3754 名,投稿数 2725 件,開催セッション 109,団体展示 32 ブース,書籍出版展示 17 件,大学インフォメーションパネル 8 大学,会合 62 件であった。
・今回講演者へのアンケートをおこなった結果概ね好評で,特にポスター発表に関しては,「大変満足」と「満足」を合わせて 90%に達して

いた。

2)財務委員会(川幡委員長)

- ・財務委員会は,「顧客の満足度をあげる」「委員の満足度もあげる」「放漫財政にしない」をポリシーとし,これについて各委員会へ説明を行い,理解を得た上で,諸活動を推進してもらった。
- ・連合大会の参加費の値上げについては,連合発足後,JGLの発行や諸委員会開催時の旅費など新たな活動及びそれに伴う支出の発生が見込まれ,健全な財務状態を維持するために,運営会議で検討した上で行った。

・2005 年会計監査について報告(藤井会計監査)

連合 2005 年決算報告について,2006 年 4 月 24 日に監査を行い,予算の執行,帳簿の整理など正常適正に処理されていることの確認をおこなった。

3)広報アウトリーチ委員会(田近委員長・原副委員長)

- ・「一般に向けたアウトリーチ活動」として,関連イベントへの講師の派遣(世界物理年,夢のたまご塾など)と一般公開プログラム開催を行った。一般公開プログラムの参加者数は,昨年に引き続き開催した「地球・惑星科学トップセミナー」は倍増の 93 名,初めての試みとなった「高校生によるポスター発表」では,176 名と大盛況であり,次大会も実施したいと考えている。

- ・「連合内部に向けた広報活動」として,連合ニュース(加盟学協会の全会員対象,電子媒体)の発信と,連合ニュースレターJGL(連合大会個人情報登録者対象に無料配布,科学情報冊子)を発行した。JGLの発行部数は 28,000 部となり,地球惑星科学関連では最大と思われる。発行にともなう経費の財源確保は懸案事項であり,将来的な有料化についての検討も必要である。

4)企画委員会(大村委員長)

- ・一般公開プログラムの内容を企画決定し,広報アウトリーチ委員会と連携して開催にあたった。より一般から参加しやすいように,今回「特別公開セッション」から『一般公開プログラム』と改名した。また,大会ポスターとは別に,一般公開プログラム用ポスターを作成し,広報活動のサポートをおこなった。

- ・インターナショナルセッションを昨年に引き続き開催した。さらに AOGS とのパートナーシップを結び,連合大会では,共同セッション開催の企画,ホームページ上では相互リンクをするなど今後も相互発展のため関係を充実させていきたい。

5)男女共同参画委員会(中村総務委員長)

- ・同委員会準備会での検討の結果,委員会正式立上げ,及び男女共同参画学協会連絡会への加盟申請の提案をしたい。

6)国際委員会(木村副議長・吉田総務副委員長)

- ・AOGS と同様に EGU とともに,連携していくことを検討している。
- ・国際シンポジウムなどの情報集約して順次ホームページにて公開していきたいので,情報を連合へ提供してほしい。

7)教育問題検討委員会(阿部委員長・根本副委員長)

- ・具体的な作業は各小委員会において進めている。教育課程小委員

会、地学教育小委員会に加え、新たに教員養成等検討小委員会(仮称)が立ち上がった。

・学習指導要領改定時期が迫っていることから、日本地球惑星科学連合として義務教育段階の教育についての提言「すべての児童・生徒が学べべき地球人の科学リテラシー」提出を行うために教育問題検討委員会と運営会議とで検討中。

・理数系学会教育問題連絡会へ派遣委員の追加のご協力をお願いしたい。

8) 質疑応答・意見交換

・男女共同参画学協会への加盟は、連合としての参加なのか、連合が加盟すれば、個々の学会からは参加しなくてよいのか。

→連合として参加するが、個々の学協会も参加され、活動を盛り上げてほしい。

9) 承認事項

◆評議会として、男女共同参画委員会設置および男女共同参画学協会連絡会加盟が承認された。

◆評議会として、教育問題検討委員会からの提案のあった提言提出について主旨として承認するが、内容の詳細は、よく審議を重ねてより良いものにするように願う。理数系学会教育問題連絡会へ委員追加派遣についても、主旨として賛同し、後日改めて決めていただくとする。

3. 日本学術会議より

1) 「科学者の行動規範」(暫定版)等に関する調査および科学者の倫理要綱・行動規範の設置状況等に関するアンケート調査について(入倉日本学術会議会員)

・日本学術会議では、一部の科学者による不正行為によって失った社会の信頼を取り戻すため、コミュニティとして何ができるかについて取り組んでいる。各学協会・機関において協力をお願いしたい。

2) 活動状況報告(永原日本学術会議会員)

・2005 年 10 月から半年間は新しい組織作りにあてられ、3つの分科会「地球惑星圏」、「地球人間圏」、「国際」が発足した。来月から、具体的な活動にはいるが、数人の委員ではカバーすることができない内容なので、連合の協力を期待している。

・現在第 2 回の連携会員を選考中であり、夏の終わりには 30~40 人が選出される予定である。

今まで組織作りの段階にあったため報告事項が少なかったが、今後分科会が立ち上がったことなどを順次連合 JGL に掲載していきたい。

3) 質疑応答・意見交換

・分科会、小委員会と連合は今後どのようなかわり方をするか。

→2007 年大会でセッションを設ける予定で、この点について検討していきたい。

・もう少し連合会員の声を聴く場を設けてはどうか。

→定期的に懇談会を持つことを計画している。

・1 年に 2 回評議会での報告のみでなく、運営会議などを通じて情報

を流してほしい。

4. 運営会議より

1) 連合大会への積極的な参加の呼びかけ(浜野運営会議議長)

連合大会を開催することは、連合の重要なアクティビティであるので、より活発な大会となるよう、新しい参加学協会は積極的にセッションを開催してほしい。

2) 連合大会への積極的な参加呼びかけに関連して 4 つの提案(北 2006 年大会プログラム委員長)

・各学協会からのプログラム委員を選出について

2006 年大会では、プログラム委員選出学協会は 15 学協会だった。加盟 40 学協会に対して少な過ぎて各分野をカバーしたプログラム編成が困難であった。是非多くの学会からプログラム委員を派遣して欲しい。

・積極的なセッション提案について

新規加盟学協会からの提案などについては、始めからレギュラーセッションとしても可能でなので、積極的な参加を待っている。

・投稿規定について

2007 年大会へ向けて、投稿規定を作成を検討しているので、協力してほしい。

・プログラム委員長の推薦について

今までは基本的にボランティアであったが、今後は広い分野・大会に複数のレギュラーセッションをもつ学協会へ依頼したいので、前向きに検討をお願いしたい。

3) 国際連携について(木村運営会議副議長)

将来は、国内のみならず国際的にも地球惑星科学分野において、影響を与える存在となることを目指したい。従って、AGU とは WPGM があるのでまだ難しいと思われるが、EGU、AOGS など積極的に連携をはかるよう模索していきたい方針である。

4) 2005 年秋以降加盟学協会紹介を兼ねて意見交換

・(大気化学研究会)単独でのセッション開催の実現はすぐには難しいかもしれないが、連合大会への積極的な参加は前向きに検討したい。

・(日本地形学連合)2006 年大会で開催したスペシャルセッション「地形」は、次大会ではレギュラーセッションとして開催したい。

・(生態工学会)2006 年大会で開催したセッションを、次大会ではレギュラーセッションとして開催したい。

・(生命の起原および進化学会)2005、2006 年大会で開催したスペシャルセッション「アストロバイオロジー」を、次大会ではレギュラーセッションとして開催したい。

・(地理情報システム学会)2006 年大会で開催したスペシャルセッション「GIS」は、次大会ではレギュラーセッションとして開催したい。

・(日本農業気象学会)連合大会へ積極的にかかわりたい考えであり、若い層の研究者は特に積極的な姿勢と思われる。

5) 承認事項

◆評議会として、運営会議からの提案に対して、連合大会への参加に

ついて各学協会は積極的に協力することまた国際連携についても理念として合意することが承認された。

5. 次期評議会議長の選出

◆廣田評議会議長任期満了により交代となる。自薦がなかったので、廣田評議会議長より次期議長として、地球電磁気・地球惑星圏学会本蔵会長が推薦され承認選出された。

6. その他

次回の評議会は秋(10月か11月)に開催。

[6] 日本学術会議だより

日本学術会議会員 永原裕子（東京大学 教授）

日本学術会議は、抜本的な改革により昨年10月、新たなスタートを切った。約9ヶ月が経過し、多くの委員会や分科会の発足、連携会員選出などが進出し、その活動が順調にスタートしている。ここでは現在の活動の概要を紹介し、とりわけ、地球惑星科学委員会の活動内容を詳しく報告する。地球惑星科学の場合、多くの対応国際組織があり、改革にともなう事務のとどこおりから、これまでにみなさまから多くの意見をいただいております。それに対する回答も含めた。

1. はじめに

日本学術会議は、国際学術団体の役員などを務める人には対外的に日本の学術団体を代表する組織としてその重要性が認識されていると思うが、それ以外の多くの研究者にとっては、研究費の配分を受けるわけでもなく、日常の研究・教育活動とは直接関係せず、特にほとんどの若い研究者にとってはなんのために存在する組織なのか理解されていないことが多い。実際には、個別の研究機関の利害に捕らわれることなく科学者を代表して発言し提言をまとめるなど、現在のわが国の科学技術政策の中で極めて重要な役割を担っている。本報告においては、日本学術会議の存在意義を理解いただくと同時に、国際協力の手続きなどの情報をお知らせする。

2. 日本学術会議の任務と組織体制

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、自然科学の全分野の約79万人の科学者を内外に代表する機関であり、210人の会員と約2000人の連携会員によって職務が担われている。内閣府科学技術総合会議がトップダウン組織であるのに対し、科学者から政策提言をおこなうボトムアップ組織として、車の両輪であるともいわれる。その役割は、主に政策提言・科学に関する審議、科学者コミュニティの連携、科学に関する国際交流、社会とのコミュニケーションである。このような任務の遂行のため、以下のような組織体制が作られている。

(1) 委員会

委員会には、企画、会員選考、国際対応など学術会議の基本的な仕事を進めるための機能別委員会、研究の専門分野の活動を進め

るための分野別委員会、特定のテーマについて検討をおこない提言を作るための課題別委員会の3種類のものがある。機能別委員会と分野別委員会は常置であるが、課題別委員会は特定テーマのために作られるもので、基本的に1年がその期限となっている。地球惑星科学に関連の深いもの、あるいは地球科学を専門とする会員がコミットしているものとしては、科学の行動規範委員会、地球規模の自然災害委員会、基礎科学の大型研究計画のあり方委員会などがある。

(2) 分科会

委員会の多くはその下に分科会が設けられている。機能別委員会の一つである国際委員会は、多くの分科会をもっている。しかし実際には専門分野が存在するような43団体および6国際協力事業については関連する分野別委員会に委託する形式となっている。分科会の構成メンバーは会員、連携会員、特任連携会員(後述)のみであり、幹事会において承認が必要である。

(3) 小委員会

各分科会の下には必要に応じて小委員会がおかれる。小委員会も日本学術会議の組織であり、その設置ならびに構成メンバーについては幹事会の承認が必要である。しかし、分野別委員会、分科会と異なり、小委員会の活動のための予算はない。すなわち、会議開催にあたっての旅費の支給などはできないわけである。そのかわり、小委員会の構成メンバーの数に関しては何の制約もなく、従来研連において活動していたメンバーのような方々が自由に参加し、活動することが可能である。

(4) 会員と連携会員

会員は210名、連携会員は約2000名であり、連携会員の選出は昨年秋以降、2回にわけて進められている。第1回目は3月末に終了し、約440名の連携会員が選出された。引き続き第2回目が進行中で、8月末までに約1500名の連携会員が選出される予定である。Cooptationにより選出される会員と連携会員とは別に、特任連携会員制度がある。特任連携会員は、分科会を初めとする学術会議の特別の活動に参加したり、国際組織の活動をおこなうために1年以内の任期で会員となる制度である。予算上は特任連携会員も一般連携会員と同じ扱いになっている。ただし、予算の関係から、人数は無制限というわけにはゆかない。

3. 地球惑星科学委員会

地球惑星科学委員会、およびその下にある分科会、小委員会の組織構成を図1に示す。

(1) 地球惑星科学委員会

地球惑星科学委員会は、会員7名より構成され、地球惑星科学を

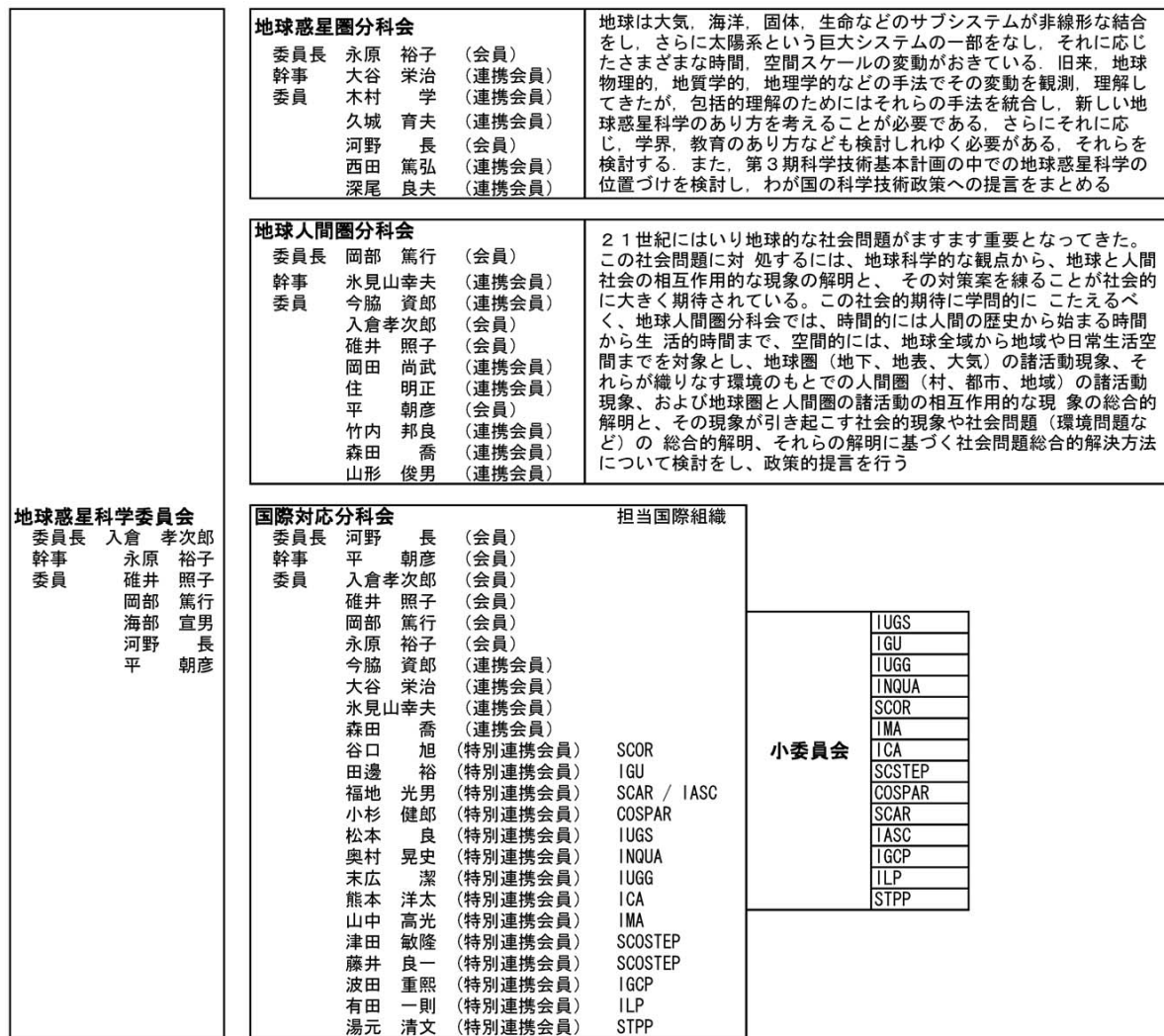


図1 地球惑星科学委員会および分科会小委員会組織図

主な研究分野とする者5名、その他を主とするもの2名である。これまでに8回の会議をもち、地球惑星科学委員会の活動をどのように進めるか、またそのためにどのような組織を作るべきかを議論してきた。その結果、主な活動に関しては地球・惑星圏分科会と地球・人間圏分科会の二つを作ることとした。また、国際対応に関しては、地球惑星科学委員会では対応すべき団体・事業が大変多いため(図2参照)、「国際対応分科会」が一括して全ての国際対応を扱うこととした。

地球惑星科学委員会は、その第1回目の会議において、今後の活動を日本地球惑星科学連合との強い連携のもと進めていくことを決定した。これは、新しい日本学術会議が個人の業績などにより選ばれ、専門分野のコミュニティを代表する形で選ばれているのではないことに鑑み、政策提言作りなどにコミュニティの意見を反映でき

ることをめざしたものである。また、日本学術会議からの情報発信も、従来のように個々の学会におこなうのではなく、日本地球惑星科学連合を通じておこなうこととした。

3月末、第1次連携会員11名が選出されたことを受け、4月末に会員・連携会員による拡大地球惑星科学委員会を開催し、連携会員の各分科会への所属、役割分担の決定をおこなった(図1参照)。第2次連携会員の選出が終了する本年9月には、委員会のメンバーが確定することとなり、ようやく具体的な活動や議論を開始する体制が確立する予定である。

(2) 分科会

地球・惑星圏分科会は、対象とする時間・空間スケールが大きく、人間・社会との関連の弱い分野を扱い、地球・人間圏分科会は研究

地球惑星科学委員会 会対応国際組織	ICSU 加盟の連合	国際地質学連合	IUGS
		国際地理学連合	IGU
		国際測地学及び地球物理学連合	IUGG
		国際第四期学連合	INQUA
	ICSU 傘下の組織	海洋学研究委員会	SCOR
		国際鉱物学連合	IMA
		国際地質学協会	ICA
		太陽地球系物理学科学委員会	SCSTEP
		太陽空間研究委員会	COSPAR
		南極研究科学委員会	SCAR
		北極研究委員会	IASC
	国際科学協力事業	国際地質学対比計画	IGCP
		国際リソスフェア計画	ILP
		太陽地球系物理学国際共同研究計画	STPP
環境学委員会対応 国際組織	国際科学協力事業	地球圏・生物圏国際共同研究計画	OGBP
		気候変動国際共同研究計画	WCRP
電気電子工学委員会 会対応国際組織	ICSU 加盟の連合	国際電波科学連合	URSI

図2 国際対応組織図

対象とする時間・空間スケールが比較的小さく、人間・社会との関連の強い分野を扱うこととしている。

国際対応に関しては、第一回の国際対応分科会が2006年3月15日に開催され、(1)当面国際対応分科会で国際対応を全て扱うことにする、(2)WCRPとIGBPは合同分科会とし環境学委員会に移管、(3)特任連携会員候補は各組織からの推薦などを基にして選出、(4)国際組織対応は、それぞれ国内委員会に相当する小委員会が行う、(5)各小委員会からの予算に関連する要求(国際会議共同主催、代表派遣等)は地球惑星科学委員会(国際対応分科会)から国際委員会に提出、(6)国際対応分科会が開催されないときの国際関係の事務や必要な決定は、地球惑星科学委員会が行う、などのことを決定した。7月末には、第2回国際対応分科会が開催される。なお、連携会員全体の選出が終わる9月以降、国際対応分科会の仕組みについては再検討をおこなう予定である。

(3) 国際対応小委員会

これまでに地球惑星科学委員会が対応する14の組織に対応する小委員会が設置され、また、IYPE、IPYなど2007年に開催される各種事業に対応する小委員会設置の手続きが進行中である。今後、IUGG傘下の各協会(IASPEI、IAMASなど)のための小委員会をIUGG小委員会と別に設置することも可能であろう。そのようなことをお考えの方は、我々に相談していただきたい。

なお、日本学術会議が共同主催する国際会議については、開催3年前の秋に申請受付、2年前に財務省に予算要求し1年度前および開催年度の予算確保、という手順になっている。したがって、このようなことをお考えの組織や団体は、開催3年前までに、準備組織や計画をたてておく必要があるの、注意いただきたい。本年秋に申請するのは2009年度開催国際会議ということになる。

以上、日本学術会議の現状と地球惑星科学委員会の現状について報告した。国際委員会対応の国内活動などに関し、ご不便をおかけしていることは承知しており、日本地球惑星科学連合を通じ、ご意見をお寄せいただければ幸いである。なお、日本学術会議のすべての委員会は原則公開であり、委員会の開催日程は、日本学術会議HP(<http://www.scj.go.jp/ja/plan/>)および日本地球惑星科学連合HP(<http://www.jpgu.org/scj/>)により確認いただける。

日本地球惑星科学連合ニュース 第3号

2006年7月28日発行

発行: 日本地球惑星科学連合

運営会議議長 浜野洋三

編集: 広報・アウトリーチ委員会

連合ニュース担当

佐藤智美